

# 壬午変乱と馬建忠

岡 本 隆 司

## はじめに

高宗19年壬午6月初9日(1882年7月23日)、朝鮮旧軍の兵は政府に反抗して、大規模な暴動を起こした。いわゆる壬午変乱の勃発である。閔氏政権は前年より、日本人軍事教官の指導を仰ぎ、新式装備の別技軍を創設、教練していた。在来の旧軍はこの新しい部隊にくらべ、はるかに劣悪な待遇に甘んじざるをえなかった。十三カ月ものあいだ未払いがつづき、この月になってようやく、一カ月分の支給があった俸米すら、量目不足のうえ、異物も混じっていた。これが原因で乱闘騒ぎをおこした兵士に対し、当局が一方的に処刑を決めたと知って、軍兵たちはこの日、かねてから抱いてきた憤懣を、ついに爆発させたのだった。

そんなかれらを掌握したのが国王の生父、興宣大院君李晙應である。さきに閔氏政権のもと、引退を余儀なくされ、ひさしく政権奪回を狙ってきたかれにとって、これは絶好の機会であった。大院君はたくみに軍兵の暴動をクーデタ化し、閔氏政権の要人を捕殺して、ふたたび政権をにぎることに成功する。

壬午変乱が以上に記したかぎりの事件だったとしたら、あるいは朝鮮の内政問題で終わっていたかもしれない。ところがこの暴動のさなか、軍兵が日本人教官を殺害したばかりか、日本公使館をも襲撃するに及んで、たんなる国内の政争というだけではおさまらなくなった。

そのため壬午変乱は、これまで朝鮮史のみならず、東アジア国際関係史の範疇においても、くりかえし論じられてきた。そこにつけくわえるべきことは、もはや存在しないようにもみえるが、一つ指摘できるのは、壬午変乱に対する清朝の動きに、なお検討の余地が残っている現状である。壬午変乱はいうまでもなく、清朝が朝鮮に派兵し、大院君を中国に送致し、軍兵を鎮圧して、閔氏政権を復活させるところで収束する。そうした経過をたどらしめた因果関係を理解するには、当然、清朝の立場からくわしくみる作業も必要であろう。それにもかかわらず、従前はほとんど、日朝関係の文脈から考察するにとどまり、そのために閑却されてきたことも少なくない。清朝側の中心人物だった馬建忠の活動は、その最たるものである<sup>1)</sup>。

筆者はさきに、「一八八〇年代以降の清朝と朝鮮と日本との関係に関するかぎり、かれこそがそのありかたを決定づけた」と論じた。壬午変乱に即していえば、時を同じくする清朝・朝鮮・日本関係の変化は、壬午変乱を直接の原因として生じた、とみるより、馬建忠がそれ以前、朝米

間の条約締結時から一貫して、すすめていた朝鮮政策にもとづく、とみなすほうが適切だというにある。それはしかしながら、壬午変乱そのものをとりあげて達した見解ではなかった<sup>2)</sup>。そこで本稿では、壬午変乱における馬建忠の活動を系統的に追跡し、かれに着目しないとみえにくい事実関係を掘りおこしつつ、上の所論を裏づけてゆきたいと思う。

## 1. 清朝の派兵

清朝政府に入った壬午変乱の第一報は、光緒8年6月18日(1882年8月1日)、署理直隸総督張樹聲にとどいた駐日公使黎庶昌の電報である。これはその前日、外務大輔吉田清成が黎庶昌のもとを訪れ、日本は朝鮮で公使館を襲撃され、公使を逐われた、と口頭で通知したのを本国にとりつぎ、軍艦三隻を朝鮮に派遣して対処しようという日本の意向をも、あわせて知らせるものだった<sup>3)</sup>。つまり清朝に伝わった壬午変乱とは、朝鮮の内乱というよりも、まず日本と朝鮮のあいだに起こった重大事件だったのである。

清朝は壬午変乱の直前まで、朝鮮に西洋諸国と条約をあいっいで締結させ、そのつど朝鮮国王をして、清朝とのあいだに宗属関係が存在する旨、表明させていた。いうまでもなく朝鮮を清朝の属国として、つなぎとめておこうと企図したものである。ところが時を同じくして、その宗属関係を否認する立場をとる日本も、朝鮮と関税・通商交渉を行なっていた。もし日朝関係が日本の思惑どおりに固まると、清朝にとってあるべき朝鮮との関係も破綻するかもしれない。朝鮮側の動きには、「陰で日本側につく朝臣も少なくな」<sup>4)</sup>、その徴候がすでにあらわれつつあった。日朝関係の推移はもはや、日本と朝鮮のあいだばかりでなく、清朝と朝鮮の関係にも不可分に連動する問題となっていたのである<sup>4)</sup>。日本が公使襲撃を口実に軍事力を用い、朝鮮に影響力を増すような展開になっては、清朝側のもっとも恐れる事態にさえ陥りかねない。壬午変乱が日朝間の重大事件に映った以上、それは当時の清朝にとって、とりもなおさず自らの重大な対朝問題でもあった<sup>5)</sup>。

このように考えていた清朝側からすれば、壬午変乱は一刻も放置しておくわけにはいかなかった。少なくとも日本にひけをとらぬ地歩だけは、ただちに確保しておかねばならない。黎庶昌が軍艦の即時派遣を進言し<sup>6)</sup>、張樹聲もそれに賛同したのは当然である。張樹聲と総理衙門が馬建忠をその艦隊に同行させた<sup>7)</sup>のも、朝鮮と西洋諸国の条約交渉にあたり、日朝関係と清朝・朝鮮関係の連動にはじめて気づき、対処してきた<sup>8)</sup>のが、ほかならぬ馬建忠だったから、これまた当然の人選であろう。折しもその馬建忠は、服喪で帰郷中の李鴻章に面会するため、安徽に向かっていた<sup>9)</sup>。張樹聲の訓電をうけとったのは、その途上、上海においてである<sup>10)</sup>。

ただしまだ、朝鮮におこった事件のくわしい経緯も明らかでなく、軍艦を派遣した日本の具体的な目的もわからなかった<sup>11)</sup>ので、張樹聲はとりあえず、すぐ出動できる軍艦、威遠・超勇・揚威の三隻を朝鮮に向かわせ、馬建忠にも「觀變」という漠然とした任務を与えておくことにした。艦隊を率いる提督丁汝昌に、出発の命令が下ったのが6月21日(8月4日)<sup>12)</sup>、かれは天津に滞

在中だった朝鮮の問議官魚允中をともなつて、6月23日に大沽を出港し、翌日煙台に着いた<sup>13)</sup>。とりいそぎひきかえし、北上してきた馬建忠は、6月25日そこで丁汝昌らと合流、翌日、中国を発ち、27日、仁川に到着する<sup>14)</sup>。

清朝政府の打つ手はしかしながら、これで終わらなかった。まもなく総理衙門が、陸軍の派遣を思い立ったからである。張樹聲が送ってきた黎庶昌の6月20日、21日付電報は、日本が軍艦につづき、千数百の陸海軍を派遣したことを知らせ、清朝側も日本に対抗して、派兵するよう求める文面だった<sup>15)</sup>。総理衙門はこれをみて、陸軍を派遣する必要をみとめ、張樹聲に折り返しその打診をするかたわら、6月24日（8月7日）に上奏して即日、陸軍派遣の裁可をえた<sup>16)</sup>。

いっぽう総理衙門から打診をうけた張樹聲は、黎庶昌の電報に接したとき、すでに陸軍の派遣は不可避だと予想し、登州駐留の淮軍を統率する呉長慶と連絡をとり、その準備を始めていた<sup>17)</sup>が、この6月24日という時点になると、あらたな方針をかためつつあった。天津に滞在していた朝鮮の領選使金允植から、さらに朝鮮の内情を聴取したところ、内乱の首謀者が国王の生父の大院君であると判明、張樹聲はこれでは、朝鮮は自力で内乱を鎮定できないと判断し、大院君の排除をふくむ乱党の鎮圧を、陸軍派遣の目的に加えたのである。張樹聲はこの新方針を総理衙門に伝え<sup>18)</sup>、呉長慶とも天津で会って協議した<sup>19)</sup>。うえで、6月28日（8月11日）、6月24日の陸軍派遣決定に対する提案として上奏し、6月30日に裁可をうけた<sup>20)</sup>。その翌日の7月初1日、丁汝昌が馬建忠の偵察結果と援軍要請をたずさえ、朝鮮からもどってきた<sup>21)</sup>。これで張樹聲の立てた方針の過たざることが、現地の状況に即しても確認されたわけである。かくして呉長慶ひきいる陸軍二千は、丁汝昌をともなつて、7月初4日に登州を出発し、朝鮮へ向かった<sup>22)</sup>。

以上の経緯をまとめると、次のようになる。まず(1)馬建忠を軍艦三隻とともに派遣し、ついで(2)総理衙門の申請で陸軍派遣が決まったが、あらためて(3)その目的に朝鮮の乱党鎮圧が加わった。(1)は日本の軍艦派遣に応じたもので、日本の企図を警戒しつつも、まだ朝鮮情勢の把握という意味を出ていない。(2)は日本がひきつづき、陸海軍を派遣したとの情報をえて、対抗措置に出たものだが、目的はあくまで日本の軍事力行使を抑止するにあった。朝鮮政府の「援護」と日本公使館の「護持」を理由に掲げて、日本に軍隊を動かす口実を与えないようにした<sup>23)</sup>。ことから、それがわかる。乱党の処置は、朝鮮にやらせる方針<sup>24)</sup>にかわりなく、清朝側が積極的に武力を行使するところまでは考えられていなかった<sup>25)</sup>。ところがこの陸軍派遣が決まるやいなや、内乱の経緯が明らかとなつて、朝鮮みずからの乱党鎮圧は不可能だとの判断から、(3)の決定となつたのである。

(1)(2)(3)はこのように、わずか十日あまりのあいだながらも、その時々に入ってきた情報に対応したもので、それぞれが個別の、いわば臨機応変の措置だった。陸軍の派遣もしたがって、一定の方針に貫かれたものではない。同じ軍隊を派遣しながら、(2)では日本軍に対する抑止力として用いるいっぽう、(3)では朝鮮の乱党を武力鎮圧するという、対日・対朝と二者並立する方針であった。もちろん両者は、張樹聲の答申でも論理上、関連づけがなされていて<sup>26)</sup>、一概に矛盾するともいえまい。しかしこうした二方針の並立は、日本の軍隊派遣の目的がまだわからない

ままだったのに対し、朝鮮の内情は把握できた、というちがいに起因していた。そのため、実地で不明な点をさぐりつつ、両者をいかに整合し、齟齬のない現実行動とするかは、朝鮮にある馬建忠らの課題とならざるをえないだろう。それを立ち入って述べる前に、以上(1)(2)(3)をうけての日本政府の出方も、ふれないわけにはいかない。朝鮮における日本側の動きはもちろん、それに対処する馬建忠の活動をも、左右するからである。

## 2. 日本側の対応

黎庶昌が上の(1)を日本政府に通告したのは、6月22日(8月5日)<sup>27)</sup>。吉田清成がかれに壬午変乱の勃発を通知してから五日後に、いわばその回答として、清朝の軍艦派遣を知らせたことになる。これがかつてない機敏な対応だと、少なからず驚いた<sup>28)</sup>日本側が、その通告のなかで何より敏感に反応したのは、馬建忠を派遣して「貴国が為に調停」させるつもりだ、との文言であった。

日本政府はただちに翌日、吉田清成をしてこの申し出を断らせた<sup>29)</sup>ものの、この「調停」が具体的にはいったい何を意味し、実際それに直面したならどう対処するかは、考えておかねばならなかった。参事院議長山県有朋が6月24日(8月7日)の閣議で、およそ「三ツノ場合」を想定する対策を提案したのも、それに応じたものである。第一に「清国ハ朝鮮ハ其属国ナルコトヲ主張シ今度ノ談判ハ清国ニテ引受クヘシト言明ス」る「場合」で、これに対しては、江華「条約記名ノ双方ノ外ニ他ノ関係」がないので「拒絶スヘシ」、第二に「清国ハ日本朝鮮ノ間ニ立チテ仲裁ヲ申入ル」「場合」、これは国際法上、日朝双方の承諾がなければ不可能だから、「我国ハ仲裁ヲ辞スヘシ」、第三に「清国ハ極テ平穩ノ言詞ヲ為シ我カ使節ト強チニ直接ノ談判ヲ為サスシテ唯々其朝鮮ト従来ノ関係アルニ付彼国ノ為メニ忠告シ其謝罪処分ヲ催促スヘキノ旨ヲ公告スルニ止ル」「場合」、これなら「一直線ニ朝鮮トノ談判ヲ遂ケ」、清朝の挙動は無視してさしつかえない、とした<sup>30)</sup>。朝鮮を国際法上の属国ではなく独立国として、壬午変乱で受けた被害の責任を直接、朝鮮政府に問おうとする考え方であり、大づかみにいって、日本側に共通する立場だろう。いうまでもなくそれは、江華条約以来の基本見解にもとづくもので、壬午変乱においても、当初から一貫していた。けれども清朝が行動を起こしたことで、いよいよその立場を明確にする必要が出てきたわけである。壬午変乱はあくまで日朝二国間の問題であって、清朝の公然たる介入は、いかなるかたちであれ、峻拒しなければならない。

客観的にみれば、こうした立場が、日朝関係をみずからの対朝問題だとみなす清朝側の立場とあいられないのは、すでに明白である。しかし日本政府は、その矛盾をこのときあまり深刻に感じなかった。壬午変乱以前には、清朝側は自らの立場をもっぱら朝鮮に向かって主張するだけで、日本に対してはなお直接に表明しておらず、日本の側もどうやらそれを察知してはいなかったからだろう。その間の事情は、上述の対策が、清朝の介入を拒絶する日本側の理由づけはいうにおよばず、清朝の介入のしかたまでも、国際法の原則にのっとって想定するところにあられてい

る。たとえば第一の「場合」で、「属国ナルコトヲ主張」することが、「今度ノ談判ハ清国ニテ引受クヘシト言明ス」るにひとしく、それも江華条約を論拠にすれば、却けるのも可能だとして、ほかの事態に思いいたっていないのは、その典型である<sup>31)</sup>。

この時点の日本政府は、「調停」という清朝の出方を問題としていたから、上の「三ツノ場合」以外を想定するのは、困難だったのかもしれない<sup>32)</sup>。だがこれを現実の清朝の対応に照らすと、日本側はそれと乖離したところで、対策を考えていた。そもそも馬建忠の任務が、その「調停」に決まっていたわけではなかったからである。張樹聲がなりゆきによっては、日朝間を調停する可能性もあると述べて馬建忠を推薦し<sup>33)</sup>、総理衙門はその推薦をうけて、馬建忠の派遣を承諾した。黎庶昌が「調停」と記すのは、総理衙門の承諾を引用してのものであり、張樹聲が可能性だとした部分は、省略する文面になっている。馬建忠が張樹聲から与えられた任務は、この時点ではあくまで「觀變」であり、かれ自身すすんで日朝間を「調停」せよ、と命ぜられた形跡はない。清朝側はこうしたいきさつから、みずからが日本に通知し、日本の側も前提にしていた「調停」という文言に拘束されず、次の方針を打ち出してくる。

6月24日、清朝側が(2)を決定すると、総理衙門はこれを即日、北京駐在日本公使代理田邊太一に通告する<sup>34)</sup>と同時に、日本政府に伝えるよう駐日公使黎庶昌にも打電した。さきに日本政府へとどいたのは後者のほうで、6月26日(8月9日)のことであった。そこには、清朝は朝鮮に対し、「字小の義をつくすため、援護にむかう」つもりであり、日本に対しては、公使館が「暴挙を受けた」ので、これを「あわせて護持せねばならぬ」とあった。一口にいえば「中国の派兵」は「朝・日を保護」するためであり、それを裏づける立場として、朝鮮が「我が属邦」だというにある<sup>35)</sup>。日本はこの通知に接して、ふたたび驚愕せざるをえなかった。陸軍派遣とその目的が、意外きわまるものだったからである。

日本側は(1)で清朝が「調停」を申し入れたとみたとき、その機敏さに驚きはしたものの、出方それじたいは、予想がつかないわけでもなかった<sup>36)</sup>し、その申し入れにも、朝鮮を属国だとする文言は、いっさいなかった。そう主張する事態もありうると想定はしたが、それはあくまで、現実「調停」をもちかけてくるさいの、一つの可能性でしかなく、日本側の主観では、容易に対処できるはずだった。その背後には、日本の目的は朝鮮から「我カ満足之償を得るに在」るので、属国かどうかを係争点とすれば、清朝と「目的外之葛藤を生」じるおそれもあり、それはなるべく避けねばならないとの考えもあった<sup>37)</sup>。ところが清朝のほうは、それからほとんど間髪を容れず、今度は全面的に「属邦」を前提として、陸軍を派遣する挙に出た。朝鮮を独立国とする日本と真っ向から対立する立場を、にわかに鮮明にしたのだから、日本側の眼にはそれが、清朝の豹変とみえても無理はない。

こうした状況にたちいたって、ただちに参事院議官井上毅が、「如何ナル処置ヲナスコト最モ適當ナルカ」と法律顧問のボアソナード(Gustave Emile Boissonade de Fontarabie)に諮問し、ひきだした答申は、「我レハ自ラ我公使館及ヒ人民ヲ保護スヘシト云フテ可ナリ」、「日本ハ朝鮮ヲ独立国ト認メ自カラ行イテ条約ヲ訂結シタルモノナレハ何処迄モ支那ノ干涉ハ頓着セス一直線

二進ミテ朝鮮ニ対シ満足ヲ求メテ可ナリ」<sup>38)</sup> というものだった。日本政府はこれにもとづいて<sup>39)</sup>、6月28日（8月11日）、吉田清成をして黎庶昌に対し、朝鮮を独立国とする日本の立場をあらためて表明、それに反する清朝軍の日本公使館警備は、はっきり謝絶する旨を回答させる<sup>40)</sup>。もちろん黎庶昌が納得するはずはなく、翌日これに反駁する<sup>41)</sup>と、吉田清成も即日、「我国於テハ朝鮮国トノ条約ニ拠リ処分可致儀ニ付曾テ貴国ニ関係候儀ニハ無之」、その「関係」のない清朝と「違言ヲ陳述候ハ徒ニ多事ニ属」す、と応じて譲らなかった<sup>42)</sup>。黎庶昌はこれにあえて反駁しようとはせず<sup>43)</sup>、東京での日清の論争は、ここでひとまず停頓する。

このように日本政府は、従前の立場を貫徹する意思を表明した。だがそれで「属邦」を前提とする清朝の立場がかわるわけではない。しかもそれに武力がともなっている以上、立場上の対立は、ただちに軍事上の対決につながりかねない。「我政府は飽迄も前来の論を主持し、且此度暴挙の非を朝鮮政府に責め敢て清政府の関渉を受くへからさる者と決意し、何処迄も抵抗すべき者と」するなら、「付ては清政府目今の景況を推せは戦端を開かさるを得さるへし」<sup>44)</sup> というのが大方の観測であり、6月27日（8月10日）の閣議でも、「此上は不得止行懸りに有之、全国決心之外有之間敷事」と決した<sup>45)</sup>。みずからの立場を貫徹するには、清朝との戦争を辞さない覚悟も固めねばならなかった。

日本政府がこのとき清朝との開戦を覚悟したのは、たしかに事実である。けれども日朝二国間なら、開戦という事態も視野に入っていたものの、清朝に向かって日本のほうから、戦争を挑むことまでは考えていなかった。外務卿井上馨がとりいそぎ軍備を整えようとしたのも、あくまで「非常ノ場合ニ至」る可能性にそなえたものである<sup>46)</sup>。それではその「非常ノ場合」とは、いったいいかなる条件でおこる事態なのか。内務卿山田顕義の表現によれば、それは「兎に角同人に先ち、朝鮮内政に関与し暴徒を討滅し清政府主位に立ち、日本始、各国と条約取結、彼の属国たるの実を示さんとする」にあった。客観的にこれを清朝側の対応と照らし合わせてみると、黎庶昌は当時(2)を通知したのに対し、日本の側はそれ以上の挙に訴える、と危惧したわけである。将来にわたる概括的な清朝の意向という点からみれば、それはそれで、あながち誤った見通しだともいえまい。しかしこの時点でみるかぎり、いささか先走った考え方といわざるをえない。前節にまとめたように、清朝の側は日本の軍隊派遣に対し、軍事力行使を抑止しようとしたのであって、日本側がそうした意図をとらえきれず、清朝側の豹変とみたがゆえの過剰反応だともいえる。もちろん当局者としては、あらゆる可能性を想定しておかねばならず、戦争の準備もその意味で、しないわけにはいかなかった。けれども井上馨が、「下の関に於て」「第一に手強く花房〔義質〕に訓令したるは、仁川に到達するや不一秒時間も遅躊せず直に進んで京城に入り咽喉を占むるの一事に有之」、

殊に花房に訓諭し曰く、若し支那人に先ちて京城に入りたるの報知を得は、即事平和の結局に至るべき事を卜知すべし、子が使事の成否は専ら清国人と京城に入るの前後遅速に關すべしと。<sup>47)</sup>

これを「〔清朝側が〕同人に先ち、朝鮮内政に関与し暴徒を討滅」という山田顕義の想定と

つきあわせてみれば、「〔日本側が〕支那人に先ちて京城に入りたる」ことで、それを未然に防いで「平和の結局に至」り、いわゆる「非常ノ場合」を生じないように、意図していたのは明らかである。

こうした訓令を出している以上、この時点の井上馨は、清朝側の出方を山田顕義とほぼ同様に想定していたことになる。しかし少し時間が経過すると、かれも黎庶昌の通告は、朝鮮が「我が属邦」だと明言してはいるものの、積極的な武力行使には言及していないことに気づいたように思われる。「非常ノ場合ニ至」る想定を捨てるわけにはいかないいっぽう、清朝側は必ずしも一方的に武力を行使し、日本に敵対するのではなく、日本に協力的な出方をするかもしれない、とも思っていた。そうした見通しは、つとに6月26日（8月9日）の時点で、ボアソナードが井上毅に漏らしたところ<sup>48)</sup>だったが、井上馨も6月30日（8月13日）には、書面で朝鮮現地の花房義質に、その蓋然性がむしろ高いと伝えている<sup>49)</sup>。そしてかれが下関から帰京したあと、7月初7日（8月20日）に下した訓令で、まとまった公式の指示となる<sup>50)</sup>。

第一 朝鮮国ノ属邦ナリトノ辞柄ヲ以テ名義トシ一面ニ於テハ朝鮮政府ヲ保護シテ内訌ヲ平定セシメ他ノ一面ニ向ツテハ朝鮮政府ヲ満足セシメ速ニ平和ノ局ヲ結ビ我兵ヲシテ朝鮮ノ地ヲ退去セシメントノ目的ヲ以テ好意ノ媒介者タラント欲スルニ在ルヘシ

第二 前条ニ反シ日清間嚮キニ台湾ノ事アリ後ニ琉球ノ事アルヲ以テ此際ニ乗シ保韓ノ名ヲ藉リ我ニ向ツテ開戦ヲ挑ミ一ハ以テ属邦ヲ保護スルノ実ヲ挙ケ一ハ以テ積憤ヲ霽サントスルニ在ルヘシ

彼若シ第一策ノ平和主義ニ出テ日朝ノ間ニ居リ調停媒介ヲ為サント謀ルトキハ我ニ於テハ其隣交ノ情誼懇篤ナル事ヲ鳴謝シ且ツ告ルニ我ハ朝鮮政府ト我政府訓令ノ趣旨ニ照ラシ直接ニ協議スヘク此際他邦ノ媒介ヲ煩ハササルヘシ乍去朝鮮政府ヲシテ我要求ヲ容レシムルノ手段ヲ朝鮮政府ニ勧誘スルノ議ヲ提出スル事アルトキハ日清両国ノ情誼ヲ重ンスルノ意ヲ鳴謝セサルヲ得ス併シナカラ朝鮮政府ニ要求スル事件ニ付テハ貴官清使ト直接ニ談判ヲ遂クル能ハサル旨ヲ以テ之ニ答ヘ若シ清使強テ直接ニ両国ノ間ニ立チ媒介者ノ任ヲ負担セント言フカ又ハ朝鮮政府ニ代リ談判セントノ論ヲ主張スルニ於テハ我レハ我カ政府ノ訓令ニ依ラサルヲ得ス且ツ我レハ他ノ媒介ナシニ七カ年前ニ締フ所ノ条約ニ依ルノ外他ノ方法ナキヲ以テ言ヲ立テ之ヲ辞シ清国ニ於テ若シ好意ノ処分ヲ望ムトキハ先ツ朝鮮政府ヲ勧諭スル事専一ナル旨ヲ暗ニ誘導スルヲ可トス而シテ清政府ハ平和ノ主義ヲ以テ朝鮮政府ヲ誘導シ直接ニ我ニ向テ媒介ヲ為サス陰ニ朝鮮政府ヲシテ此紛議ヲ速ニ終局ニ至ラシムル如キ手段ニ出ル時ハ我ヨリハ之ニ喙ヲ容ルルニ及ハス其意ニ任スヘシ……<sup>51)</sup>

「非常ノ場合ニ至」る「第二」を記してはいるが、これはすでに「馬関ニ於テモ既ニ面陳セシ」訓令で想定していたところなので、「京城ニ直入シ且城内ニ屯営ヲ定メ速カニ日ヲ期シ国王ニ謁見ヲ乞」うよう念を押すにとどめ、あらためて具体的な指示を出していない。この訓令は、まず花房義質がなすべきは、清朝軍よりはやく京城に入って朝鮮政府との交渉に着手するにある、という方針に依然かわりがないいっぽうで、あらたに「第一」を想定し、そのさいどうするか

示を出したもののなのである<sup>52)</sup>。問題となるのは、清朝側が「名義」とするであろう「朝鮮国ノ属邦ナリトノ辞柄」であって、これを是認するわけにはいかない。それには「一切不取敢……他人ノ傍議ハ一切不受付様及訓令セシ」<sup>53)</sup> ところを確認し、あくまで日朝二国間の問題として処理するよう、強く求めると同時に、それに矛盾しない範囲なら、清朝の調停工作は黙認してもよい、としたのであった。

そこで見逃せないのは、すでに清朝政府が(3)の方針を決めて動き出していたのに対し、井上馨が具体的な指示を出さなかったところである。それには理由がないわけではなく、日本に対する清朝側の通告が(2)までにとどまり、日本政府は(3)を知らされていなかった事情が、その最たるものだと思われる。しかし山田顕義の「暴徒を討滅し」との言はもとより、井上毅も「朝鮮ノ暴徒ヲ鎮圧シ」と発言している<sup>54)</sup> ので、日本側にもある程度、清朝の陸軍派遣に乱党鎮圧のねらいもあるはずだと、予想はついていた。それが花房義質に伝えられてもよかったはずである。けれどもそうはならなかった。清朝軍による乱党の鎮圧とは、朝鮮の内政に干渉するにほかならず、もっぱら「非常ノ場合ニ至」る条件として、想定した事態だからである。井上馨も、上の訓令にいわゆる「第一」の、清朝側が「平和主義ニ出テ」た場合には、「朝鮮政府ヲ保護シテ内訌ヲ平定セシメ」る、とみているから、かれが清朝軍の乱党鎮圧を念頭に置いていたとしても、それは「第二」の「我ニ向ツテ開戦ヲ挑」む場合と不可分なものと判断していたと考えられる。乱党鎮圧＝内政干渉＝日清開戦。日本側の立場と論理にしたがって、「非常ノ場合」を端的に整理すれば、このような図式になるであろう。

これを逆にいえば、「非常ノ場合ニ至」る条件が解消するなら、この図式全体が成立しないことになる。花房義質の任務はまず、清朝軍に先んじて京城に入り、朝鮮政府と交渉を始めるにあった。それは開戦につながりかねない清朝側の出方を未然に阻止して「平和の結局に至る」行動にひとしく、「非常ノ場合」そのものをなくそうとするわけだから、清朝軍の乱党鎮圧も、おのずから実現しない。「第一」はいわずもがな、「第二」に対しても、(3)の想定と対策をあらためて、考慮に入れなくともよかったのである。

こうして舞台は、朝鮮に移る。清朝側の対応のうちもっとも重要な部分は、最後まで本国政府から、現地で対処すべき事態として指示を受けないまま、花房義質は馬建忠とあいまみえることとなる。

### 3. 馬建忠の「觀變」——1882年8月10日～8月12日——

6月27日(8月10日)午後、仁川港に入った馬建忠は、さっそくその日のうちに任務にとりかかった。夜遅くなってようやく停泊できると、超勇に搭乗していた魚允中を呼び寄せ、内密に偵察を依頼し、随行の朝鮮人を花島に赴かせた。四時間ほどしてどってきたその朝鮮人の調べたところで、王妃と興寅君李最應ら重臣五名が、この内乱のなか急逝したことなど、壬午変乱の現状は明らかになったが、経緯は「未だ要領を得なかった」ので、ひきつづき魚允中に、その「心



腹」を派遣し王京の状況を探らせることとした<sup>55)</sup>。

翌28日の午前中、魚允中の偵察活動と並行し、馬建忠じしんも朝鮮・日本の官吏と会って、情報をあつめた<sup>56)</sup>。なかでも日本の書記官近藤真鋤との会談が重要である。馬建忠はかれに王妃急逝の事情をたずねて、内乱の首謀者が大院君であり、現在その「大權獨攬」だという朝鮮政府の状況をはじめて知り、「それでは〔朝鮮〕国王すら、おそらく自主できない」とみなしたからである。さらに、

「花房公使は今日明日中に来るでしょう。着いたらすぐ王京に向かい、〔乱の〕原因をさぐりだし、あらためて〔朝鮮政府と〕交渉を行います。昨日すでにわたしから王京に書簡を送り、＜〔花房〕公使が近いうちにまいります＞と伝えました」<sup>57)</sup>

と告げられて、内心、あらかじめ張樹聲から言い含められていた陸軍派遣の要請<sup>58)</sup>を急ぐ必要を痛感した。近藤真鋤との会談を終えたのち、正午にふたたび魚允中を呼び出し、その偵察結果を報告させ、自分のあつめた情報の裏づけをとって、即時の陸軍派遣を要請することについても、魚允中の同意をえた<sup>59)</sup>。「觀變」でまず決めた方針は、大院君の「大權獨攬」をくつがえす<sup>60)</sup>べく、清朝本国にはたらきかけるにあった。

さすがに現場にあるだけに、くわしい情報をつかんではいらぬ。けれどもそれに対する判断は、第1節にみた(3)の方針決定を、いわば朝鮮の地で再現している感がある。さきに引用した近藤真鋤の言には、日本が武力を行使するとは一言もいっていない。にもかかわらず、馬建忠が陸軍派遣要請を「こんなにも急」いだのは、

一つには乱党が、時日のたつ間に蔓延すれば、たちまち撲滅しがたくなるのを恐れてのことです。一つには日本の花房義質・井上馨らが、そのうち艦隊をひきいて漢江に集結するだろうからです。もしそのときになっても、中国が何の動きもおこさなければ、日本側は大軍をともなつて、先に漢城に行き、自らの手で〔乱党を〕捜査処分するにちがひありません。そうなったら朝鮮国内は、その害毒を受けるのは必至です。また今後、日本は乱党平定に功があったということで、強大なる隣国の気焰をますます逞しくしましょうし、中国は救援が及ばなかったということで、にわかに属国の失望を招くかもしれません。それでは属国の服属はいよいよおぼつかなくなり、中国の国威もそのために傷つくのは免れないでしょう。<sup>61)</sup>

とみえるように、日本軍が先んじて乱党を鎮圧する可能性を危惧し、対抗上とにかく援軍を要請せねばならぬ、という焦燥にかられてのものであった。日本のねらいをなお見きわめないまま、その動きに危惧を抱いて、派兵にふみきったところは、期せずして本国政府と同一だった。そのためそれがはらんでいた問題も、ほぼそのまま現地のほうからすすんで、引きうけることになる。

しかしそのことは、馬建忠もよく自覚していたようで、この日かれの決定した方針も、援軍要請だけにとどまらなかった。近藤真鋤の発言に対し、

「わが北洋大臣はさきに、わが東京駐在公使の電報に接しまして、ただちにこちらへ軍艦を派遣し、もらさずさぐりを入れ、内乱のおこった事情を仔細に調べさせるということで、わたしがやってまいりました。ちょうど西洋各国と条約をむすんだ直後ですので、はなはだ疑わ

しく、すぐ人をやり、ことがおこった原因をつきとめさせたいので、あらためて〔乱党を〕捜査処分するつもりです。いまもっとも緊要なのは、〔朝鮮〕国王を乱党の手から救い出す策を講じることです。花房公使がこちらに来られましたら、わたしのほうからご相談に伺いましょう」<sup>62)</sup>

と述べ、ここで決心したのであろう清朝軍による乱党「撲滅」は、もちろん口にしなかったものの、「自主できな」くなった「朝鮮国王を乱党の手から救い出す」という、その目的は明示している。それを花房義質との会談の足がかりに、日本側の目的をくわしくさぐろうと、またあわよくば、日本側をして自分の意見に同調せしめ、その動きを封じようとねらったものである。

援軍要請のため、馬建忠本人ではなく、丁汝昌が代わりに中国にもどってきたのも、花房義質がほどなく到来するため、自分がいま朝鮮を離れるわけにはいかなかったからである<sup>63)</sup>。来るべき花房義質との会談を、馬建忠がいかに重視していたか、ここからうかがわれよう。その日のうちに、張樹聲にあてて援軍の要請状を書きあげ、自分の搭乗していた威遠ともども丁汝昌に託し、翌朝早々に出発してもらうことにするいっぽう、自身は揚威に移乗して、花房義質を待つ態勢を整えた。

その少し前、威遠で要請状を認めているさなか、馬建忠を訪ねてきたのは新任の仁川府使任榮鎬だった<sup>64)</sup>。この人物が大元君の党派なのは、すでに馬建忠も聞いていた<sup>65)</sup> ので、かれとの筆談では、それを確かめたのち、とりいそぎ王京の大元君に使いを出し、「すみやかに心腹の大官をこちらに派遣し、われわれと協議させる」よう、かれに依頼した<sup>66)</sup>。馬建忠がことさら、このような依頼をした目的は、

いま王京との連絡が通じなくなりましたので、大元君の心腹の派遣がかなえば、その動静を少しはうかがうこともできるでしょうし、また「日本とのあいだを調停する」という説を利用して、甘言をくравせ、恩恵を示し、われわれに疑いをもたないようにしむければ、今後やりやすくなろうかとも思います。<sup>67)</sup>

と、援軍要請状に書き添えているとおりだが、これには若干のいきさつがある。6月27日夜半、花島での探索結果を報告しにきた魚允中との筆談に、

「さきに花島まで人をやって探らせたさい、かれに＜あなたが軍艦を率いてやってこれれ、わが国のため庇護し〔日本とのあいだを〕調停される＞とふれまわらせました。……」

「……しかしいま乱党は、貴朝廷はもう捜査して処分に付されたのですか」

「兵士が日本人を殺したこと、もし伝聞のとおりなら、殺害した者は処刑してでも懲罰を加えねばなりません。しかるのちはじめて日本側と交渉できるはずです。これすらまだやっていないのは、とりわけ大失策です」

「日本側との交渉については、貴国が〔乱党を〕捜査処分してから、あらためて考えなくてはなりません。ですから明日、わたしはとりいそぎ貴国王にお願いして、直々に適任の大官を派遣していただき、かれと協議しようと思っています。これはもう猶予なりません」

「明日人を王京に派遣したのち、あらためてご相談に預かりますが、日本側が受け入れるな

ら、やはり調停を提示してもかまわないでしょう」

「もちろん機をみてお答えになってよい」

「日本と朝鮮があい讓らなければ、仲裁調停に頼らねばなりません。さもなくば、齟齬錯誤なきを期せません」<sup>68)</sup>

という一節があり、朝鮮到着当初の馬建忠の心づもりがかいまみえる。馬建忠による自国と日本との調停に期待をふくらませ、花島でこれを吹聴させた魚允中に対し、馬建忠本人はむしろ消極的だった。これは前述したとおり、場合によっては調停もありうるという、(1)段階での張樹聲の判断をそのまま受けたもので、魚允中も日本政府と同様に、調停を馬建忠の既定任務だととりちがえていたきらいがある。馬建忠は結果として、自分が調停に乗り出さないこともないけれども、調停さきにあるきではない、それには朝鮮政府の手で内乱を鎮圧し、関係者を処罰することが前提となる、と魚允中をたしなめた。その一方で朝鮮側に対し、馬建忠がここで緊急に求めているのは、調停となるかどうかを問わず、国王がみずから、自分との協議にそなわる使者を派遣するにあった。国王の代理たるその使者を通じて、日本との折衝も含めた、朝鮮政府の今後の施策に、自分の、ひいては清朝の影響力を及ぼそうと企図していたのだろう。ところがそれは、国王の実権喪失と乱党の首謀者大院君の政権掌握という事態の判明、そして清朝軍の乱党討伐という対策の決定によって、実現不可能となった。折しもそこにあらわれた任榮鎬は、大院君の党派だから敵対する側の人物だが、馬建忠は当面、それをむしろ逆用して、流布した「日本とのあいだを調停する」という風説を口実に、援軍到着までのあいだ、朝鮮政府を籠絡しておこうとしたわけである。

まもなくその「心腹」としてやってきたのは、趙寧夏と金弘集である。予想以上に深刻な現地の事態を目のあたりにし、焦燥感をつのらせていた、このときの馬建忠にとって、これはおそらく暗の中に一条の光をみる思いだったにちがいない。この二人はさきに馬建忠の立ち会いのもと、朝鮮がドイツと条約を締結したさいの全権大臣だった<sup>79)</sup>から、排外的と目される乱党が、朝鮮開国を推進してきた重臣としてかれらを害するにちがいないと見られていた。それにもかかわらず、大院君の派遣したのが、ほかならぬかれらだったことで、馬建忠ははからずも、乱党の支配する政権に属しながら、旧知で親しい仲介者を得るのであった。

朝鮮に到着して二日と経たぬ間に、馬建忠はこうして矢継ぎ早に、清朝・日本・朝鮮と三方にむかってはたらきかけを開始した。そのうち第一の、本国に要請した援軍がつくには、しばらく時日を要するから、それに先立つ後二者の動向が当然、援軍のとるべき行動にも影響を及ぼすはずである。したがってまず、援軍到着にいたるまでの、馬建忠と日本側・朝鮮側との折衝をたどっておかねばならない。

#### 4. 馬建忠の対日・対朝交渉 — 8月12日～8月16日 —

6月29日（8月12日）、丁汝昌が朝鮮をあとにしたのとは入れ替わりに、花房義質が到着し

た。手ぐすね引いて待ちかまえていた馬建忠は、その報をきくとただちに腰をあげ、花房義質を訪れた。翌日、花房義質から答訪があったので、このときはあわせて二回、会談をもったことになる。まだ具体的史料のえられなかった田保橋潔氏は、その内容を「単に儀礼に止まり、両者の任務については、深く触れなかつたものの如く」と推測している<sup>70)</sup>が、はたしてそうだろうか。まず第一回の会談をみてみよう。

「わたしは四方に探索の手をのばし、この事件は実は乱党がおこしたものとわかりました。去年の、企てはありながら未遂におわった党派と同じです。朝鮮朝廷の意思に出たものではない以上、一方的に責任を問うわけにもいかないかと思います。乱党蜂起は、どの国にもあることです。不幸にして、あなたは折悪しくそれに遭遇されたただけなのです。しかしこの事件はどんなさるおつもりか、聞かせていただけませんか」

「こちらにやってきたのは、事件がおこった原因を調べるにあります。しかるのちあらためてどうするか決めるつもりです」

……

「……貴国が派遣されてきた軍隊はもう上陸したのですか」

「すでに命じて一二百名を上陸させました。明日わたしはみずから仁川に行き駐在するつもりです」

「兵を動かすのは少しお待ちになったほうがよいでしょう。閣下は不日、王京に直行される、と聞きましたが、そうですか」

「もし朝鮮朝廷が大官をこちらによこして交渉するなら、王京ゆきはしばし延期してもかまいません」

「昨日すでに仁川府使が王京に人をやって、すみやかに大官をこちらに派遣し、協議させるよう要請しております。明日には来るはずですよ。やってきましたら、すぐあなたにお知らせします。ただわたしの聞くところ、国王は幽閉され、自主できない、とのことですよ。もしあなたが卒然、兵を進められましたら、国王はおそらく害に遭うでしょう。国王が保全されなければ、大院君はもともと外国との通交を憎んでおりますので、かれが大権を専らにした（大権獨攬）あかつきには、この事件は容易には落着きますまい。とはいえ貴国の軍艦も、遠征があまりに長期にわたりましては、不都合でしょう。ですから当面の策としては、なんとか国王に自主を回復させることのみです。そうなればあとはやすやすと事が運ぶでしょう」

「たいへん結構です。清朝があなたをこちらへ捜査処分に派遣されると聞き、とてもうれしかったのですが、国王に自主を回復させるのにどんな妙策がありますか」

「これはきわめて重要な問題ですから、詳密な調査で真相をみきわめてからでないと、策は定められません。……」<sup>71)</sup>

ここから少なくとも、前節にみた馬建忠のねらいが確認できる。大院君の政權掌握を認めることはできず、「国王に自主を回復させる」というみずから設けた目的を、かれは日本側の立場に背馳しないように提示し、日本の進軍がむしろ自らに不利だという論法を立てることで、それをひ

きとめようとしたのである。花房義質のほうもさしあたって、これを了承したようにみえる。

しかしこの筆談は馬建忠側の記録なので、会談が実際にこのとおりだったと断言はできない。確実にいえるのは、会談がそのようにすすんだと馬建忠が上申したことだけで、とりわけかれの所説が花房義質に伝わったかどうかは、疑問が残る。事実この会談に関し、花房義質は馬建忠の「來意ハ全ク今般ノ暴挙ニ対シ朝鮮政府へ忠告致候趣意ニ有之右ニ付テモ兵員召寄置不申テハ不都合ニ付丁汝昌氏ハ一応ノ事情上申致シ且陸兵呼寄候為メ一応帰航來ル十六七日比再來可致旨等申聞候」と報告しており<sup>72)</sup>、記事の精粗は別にしても、互いかなりの懸隔がみてとれる。それは当然で、この報告も会談の正確な内容を伝えるというより、しばらく時日を置いたのち、清朝側の出方に対する判断を下し、「朝鮮政府をシテ日本政府江悔悟之意を表サシムル之内助スル策と奉存候」という井上馨の予測<sup>73)</sup>を、実地に裏づけた旨、知らせるものだったからである。ここからともかくわかるのは、花房義質が馬建忠の発言を、あくまで日本側の関心から解釈していたことであり、したがってその掣肘を受けることも、ほとんどありえなかった。

このように、とりわけ日本側の姿勢に目立った変化をもたらしなかった点では、この会談を「儀礼」的だとする評言も、あるいはあたっていよう。それは花房義質が答礼にやってきて、再度会談したときも同じである。ただし朝鮮側の大官が来れば、王京行きをしばし延期できる、という前日の花房義質の発言があり、馬建忠はすでに、趙寧夏と金弘集より到来の連絡をうけていた<sup>74)</sup>から、この会談では、

「お手紙拝受、趙・金二人がやってきたとの由、深く感謝いたします」

「かれらは昼にこちらにやってくるはずです。会いましたら、そちらにうかがうよう伝えませんが、いかがですか」

「お願いします。わたしは午後に出発することになっていますので、もしかれらが間に合わず船中で会えなかったら、こちらから花島にまいります」

「かれらは執政が協議をまとめるために派遣したものですが、貴国の最終的な要求を知りません。僭越ながらご教示いただき、前もってかれらを伝えておいて、すみやかにこの事件が解決するようにすれば、いっそう好都合なのではないでしょうか」

「こちらの要求は向こうの出方によります。もし好誼を望んで来るのなら、こちらの要求は謝罪・乱首の懲罰・兵費の賠償・見舞金の支給・今後の日本人居留の安全確保のみです。しかしそうでないのなら、予断を許さないものがあります」<sup>75)</sup>

とあるように、趙寧夏・金弘集と花房義質とのあいだをとりもつ姿勢を、いっそう鮮明にしている。花房義質が前註 72) に引いたような論調の報告をしたのも、こうした馬建忠の姿勢を念頭においてのものだったのかもしれない。馬建忠じしんとしては、まだ詳しくはわからなかった日本側の要求を聞きだすため、また同時にそれを、自分と趙寧夏らとの会談の材料とするため、そうした役割をみずからに課したのだろう。

その趙寧夏と金弘集は花房義質が去って、まもなく揚威に姿を見せた<sup>76)</sup>。この会談は馬建忠が、事実上はじめて朝鮮政府と接触したもので、それまでにあつめた情報よりえた日本・朝鮮それぞ

れに対する認識と、そこから組み立てた対策を、はじめて提示した点が重要である。まず趙寧夏・金弘集に朝鮮政府の代表として、壬午変乱の経緯を説明するよう求め<sup>77)</sup>、ついでかれらの派遣が大院君の意に出たもので、それまでの自分との関係から選任されたことを知った<sup>78)</sup>。そのうえでようやく馬建忠は、問題の核心に入る。

「大院君はお二人を派遣されるにあたり、日本に対処する方策を何かおっしゃってませんでしたか」

「日本は過日、朝鮮政府に書面で通知し、兵五百を京城城内に進駐させたいといってきました。ところがいま日本側はすでに千人が上陸しております。これでは政府はどう答えたらいいのかかわからないところがあります。日本に対処する方策などあるのでしょうか。取り乱して書信や礼物を施し、事変の顛末をつぶさに伝え、あわせてこれまでどおりの修好の条件を提示しているのに、それでも日本側が不満だというのは、どうしても納得いきません。どうしたらよいかご教示下さい」

「花房はお二人が来たことをもう知っています。朝来訪して、あなたがたに会いに来るよう伝えてくれと、わざわざわたしに頼みました。行けますか」

「わかりました。少し前に名刺を届けさせましたが、それなら帰路ちょっと立ち寄ろうかと思えます。いまご教示下さることがあるなら、おっしゃるとおりにいたします」

「日本政府は軍艦を出動集結させ、すでに各国に通知もしていますから、この事件の解決は、弁舌だけでは争い難いものがあります。そこで中国も、軍艦をこちらによこして動静をみることにしました。しかし解決が遅れば遅れるほど、不利になります。……ですからこの問題は、すみやかな解決が重要です。それには執政がまず、心腹の大官を派遣して、うまく言って交渉につかせ、謝罪を名目としていただき、しかるのちわたしが、あらためて横から調停するほかにはなく、これなら解決しやすくなるかもしれません。とはいえ花房は<この問題は国王直々に出て来ていただくか、さもなくば大院君みずから交渉に来ていただかなくては、解決できない>といっております。わたしの考えでは、日本の今回の出兵は名分がありますので、他国の調停のかなわぬところもありますけれども、国王が直々に交渉のためお出ましになるのは理不尽ですから、お二人のうちどちらかが明日、とりいそぎ京城にもどり、ひそかに大院君に、専断をもってみずからこちらにお出ましいただき、花房と協議するよう、申し上げていただきたい。幸い、大院君は威望もとより著れ、しかも我々がこちらで保護しますれば、日本側もあえて無礼をはたらくようなことはありますまい。これはわたしが請け合います。けっして貴国にひどい結果にならぬよういたします。遅疑されれば時機を誤り、以後の情勢は予断を許さなくなしましょう」

「ゆきとどいたご教示、感激です。わたしがこちらにまいりますさい、国王から命をいただき、大院君からも意を承り、もしあなたからご教示いただければ、相談のうえ決定するから即刻知らせるように、とのことでした。ですからつつしんでご教示のとおりに上申いたします。しかし今後のことは予断をゆるしません。花房がもし今すぐ京城に行くとするれば、いっ

たいどうすればよいのでしょうか。ご面倒ながらあなたにも来ていただくしかないと思いますが、いかがでしょう」

「花房はもともと王京に急行するつもりだったのですが、わたしが再三＜王京は乱党がまだ平定されてないので、にわかに入京すれば不測の事態が生じかねない＞と説得すると、花房も仁川で数日待つことにしました。ですからわたしはとりいそぎ、大院君に京城を出て交渉いただきたいのです。そうすれば花房の京城行きも阻むことができます。これが遅れればどうなるか、わたしにもわかりません」

「あらかじめご説得いただいたとは、感じ入ります。つつしんでただちに申し伝えます」<sup>79)</sup>

趙寧夏らが朝鮮側の立場から、日本側の行動は心外きわまりなく、その理不尽さに対応のすべがないと訴えるのに対し、馬建忠は冷淡な態度を持している点、目を惹く。これはおそらく、国際関係にも通曉するかれが、花房義質との会談で日本側の論拠と手続を知って、一概に却けがたいとみたところからきたものである。日本側の「出兵は名分がある」と趙寧夏らに説き、朝鮮側の態度をまず軟化させようとした。

その目的はもちろん、いっきよに日朝間を和解させるにあるのではない。当面とにかく両者の決裂は回避して、日本の王京進軍をくいとめたい清朝側の利害に出るものだった。そこから馬建忠は、もう一歩進めた提案をしている。大院君じしんが京城より仁川に出てきて、日本と直接に交渉するよう、すすめるくだりがそれである。花房義質の希望というのは、馬建忠の虚構であって、日本の進軍を「阻むことができる」説得力をもたせるのみならず、これを口実に大院君をおびきだし、その身柄拘束に及ぼうとしたものでもあろう<sup>80)</sup>。馬建忠は以上をもって、とりあえず現状では手をつくしたとみなし、趙寧夏・金弘集の活動を見守り、その結果をまつことにする。

趙寧夏と金弘集は、別れぎわ馬建忠から託された書簡をたずさえて<sup>81)</sup>、日があらたまらないうちに花房義質のもとに赴き、「今夜僕京ニ返リ主上ニ謁シテ密ニ公使ノ入來及馬建忠ノ來リタルヲ奏シ明後日再ビ此地ニ來ルヘニ付願クハ姑ク此府ニ留マリ以テ再報ヲ待タレン事ヲ」と述べて、二日の猶予を求めた。花房義質も馬建忠との筆談にあったとおり、これをうけいれた<sup>82)</sup>。ところが約束の二日たった7月初2日（8月15日）、趙寧夏が王京からもどってきて、またもや「兩三日」の猶予を求めると、さすがに花房義質もこれを承諾はできず、翌朝の出発をきめた。このときの様子を、かれは次のように記す。

趙曰事既ニ奏聞ヲ経ルト雖大院當路聖衷暢ルニ由ナシ大院今公使ノ随員入京ヲ喜ハス必ス之ヲ城外ニ置カント欲スヘシ公使宜シク断然入京アルヘクシテ其公幹ノ如キハ願クハ僕歸京ノ後ニ提出セラレン事ヲ兩三日ヲ<sup>ママ</sup>徑ハ僕京ニ歸リ内ヨリ賛成セハ必ス好果ヲ結フニ至ラン希クハ公ノ趙某ヲ信シ僕ノ言ヲ採用シ玉ン事ヲ

公使曰貴下姑ラク濟物浦ニ滞ルトナラハ公幹徒ラニ貴下ノ歸京ヲ待ツヘカラス貴下若シ意アラハ速カニ歸リ尽力セラルヘシ云々<sup>83)</sup>

趙寧夏がもっぱら時間稼ぎに終始したような印象をうける反面、日本の京城進軍それじたいは、否定しようとしなければかりか、その時期はともかく、むしろすすめるような口吻でさえあるとこ

ろ、眼をとめておきたい。花房義質が自分の行動を正当化するため、曲筆したといってしまうばそれまでだが、同日の趙寧夏らと馬建忠との筆談とつきあわせると、どうやらそうとばかりもいえない。かれらは馬建忠が何よりも重視した日本の進軍阻止に、それほど拘泥していたようにはみえないからである。

「さきに花房にお会いになって何といっていましたか」

「すぐ兵を率いて京にゆくといっていました。何度とめてもききません。……」

「さっきかれから書簡をうけとりましたが、そこにも＜明朝兵を率いて京にゆく＞とありました。わたしは大院君がこちらに来られれば、花房の入京を阻止できると考えていましたが、もうとりかえしはつかないでしょう。しかしかれが入京したら、政府が十分にもてなさなければなりません。四五日後にはわが兵も到着しますし、他国の軍艦も来るでしょうから、かれらの意気も次第に奪われてゆくでしょう」

「丁軍門（丁汝昌）が到着されなくとも、あなたにはご苦労ながら、ぜひとも王京にきていただきたい。……国王もそうお考えです」

……

「さきに花房に会ったとき、＜日本軍がもし入京されるなら、中国も敵邦のことが心配でしょうから、いまとなつては、お二人とも兵を率いて入京されるべきです＞と申し上げましたから、かれも清軍の来ることは知っています。ですから南陽でお待ちになることはありません。入京駐紮いただければ、我が国の大小臣民には、干天慈雨です」<sup>84)</sup>

趙寧夏らは花房義質も記すとおり、実権を握る大院君を快く思っていなかった。日本側がどうしても譲らず進軍するなら、それを無理に押しとどめても、かれを利するだけである。それならむしろ進軍させて、かれを窮地に追い込んだほうがよい。だからといって、日本側の独擅場になっても、朝鮮側としては不都合なので、馬建忠の入京をもうながしていることが、なかんずく引用末尾の発言からうかがえよう。いわば清朝と日本を同時に王京へひきいれ、両者の勢力を借りつつ、しかも相殺させて、みずからが望むかたちの事態収拾を実現しようとの底意があったとみられる。

馬建忠はすでに花房義質の書簡をうけとる前に、大院君本人からも、王京を離れることはできない、との通知をうけていた<sup>85)</sup>ので、自分の企図はひとまず断念し、あらたな対策を考えなければならぬと承知はしていた。さりとて趙寧夏らのいう日本と同時の入京は、もってのほかだった。再三の趙寧夏の要請にもかかわらず、動こうとはしなかった<sup>86)</sup>のは、かれが単身、丸腰で王京に乗り込んでも、日本と朝鮮のあいだで翻弄されるだけの危険があったからである。ここはどうしても、本国からの援軍を待たねばならない。そこまで馬建忠の決心が堅ければ、趙寧夏もそれを翻すすべはなかった。そればかりではない。そのことは逆に、自分たちが馬建忠と行動をともにするか、かれをさしおいて日本軍とともに王京にもどるか、旗幟を鮮明にするよう迫られているにもひとしかった。かれらは当然のように前者を選択する<sup>87)</sup>が、日本と清朝のあいだ、大院君と馬建忠のあいだで、なお両端を持する底だったかれらも、ここで完全に馬建忠の代理人



と化す。清朝・朝鮮間に関するかぎり、壬午変乱収拾の構図は、ここで決定的になったといつてよい。

それにしても、馬建忠に今更ながら解せなかったのは、日本が断乎、王京に進軍してどうするのかという疑問だった。

「花房は入京して何をするつもりなのか、また誰を相手にするつもりなのか、いってませんでしたか。大院君は日本軍が入京すると聞いてもなお成算があるのですか」

「花房が軍隊を率いて入京する目的は、かれの言では＜友好国に内乱がおこったなら、義として保護しなければならないし、乱軍乱民は懲罰しないわけにはいかない＞ということでした。また大院君を相手にするのを望んではおらず、国王に引見してもらって申し上げたいとのことでした。大院君は日本軍が入京すると知ったら、どうしようもないでしょう。」<sup>88)</sup>

趙寧夏が花房義質の言を、ありのまま伝えたとも思えないが、この程度なら馬建忠には、もう予想、あるいは了解していたことばかりである。日本軍が先に進発する以上、援軍が到着するのを待ちつつ、それまでに日本の意図をもっと精確に把握して、対処のしかたを再考するほか、このときの馬建忠に、打つ手は残されていなかった。

翌初3日（8月16日）の夜、そんな馬建忠の前に突然あらわれたのは、日本の外務大書記官竹添進一郎だった。かれは入京する花房義質と別れ、復命のため帰国する途上、その意をうけて馬建忠を訪問したのである。従来はこの会談を、壬午変乱が決着にむかう一つの転機として、重視してきた。もちろん重視するにやぶさかではないが、ここまでの叙述と考えあわせると、その根拠にはいささかの修正を要すると思われるので、いま一度くわしくみておこう。

「……この事件の解決ははなはだ困難です。なぜなら執政の人は国王に任命されたわけではなく、執政と交渉しようとしても、その執政の名分が正しくありませんし、国王と交渉しようとしても、国王は自主できないからです。いま花房公使は漢城に向かわれましたが、まずどこから着手されるおつもりなのでしょう。乱党が暴動を起こし、公使館を攻撃したといつても、それは朝鮮政府の命令によるものでは決してありません。それはいわずとも自明でしょう」

「この事件の解決はたしかに困難です。しかしその曲直を断じて、朝鮮を平定してしまおうというのは、ほとんど干渉にひとしいものです。花房の考えはわかりませんが、私見を述べさせていただきますと、朝鮮政府が国王の命令をもって、この事件について協議しようというのなら、我々からみれば、ともかく名分は正しいということになります。その国情についてみれば、党派の政権争奪であって、開国か鎖国かを争っているわけではありません。ですからすみやかに交渉を決着させて、そのうえでおもむろに曲直を調べることにしてもよいのではないかと存じます」

「いかにもおっしゃるとおりです。貴国と朝鮮は対等の国ですので、その内政をどうこうすることはもちろんできません。けれどもこの事件を解決するには、公使館を攻撃した反乱首謀者を懲罰すべきで、それとあわせて、善後策も講じるべきだと思います。乱党を除かない

と、善後策はけっきょくうまくいかないからです。花房公使におかれましては、朝鮮政府とのすみやかな交渉決着をよしとされるのも、なるほどごもっともです。しかしわたしは大局からみるがゆえに、朝鮮の朝政を焦慮しているのです」

「わが国の意はもっぱら交誼を更新するにあり、朝鮮の乱につけこんで掠奪をはかろうとするものではありません。ですから朝鮮への要求も、反乱首謀者の懲罰と善後策の策定にすぎません。わたしはすみやかな決着のみを切望しています。もし時日が延びれば、朝鮮の乱民がふたたび暴動を起こすかもしれず、そうなったらわが国は軍隊をもって、その罪を問わねばなりません。そんなことになれば、朝鮮との交誼は絶たれ、アジアの全局はいっそう危うくなります」

「まことにおっしゃるとおりです。善後策はどうすればよいですか。あなたはすでに成案をおもちでしょうか」<sup>89)</sup>

以下、具体的な日本側の要求を議論する後半につづくけれども、それはむしろ派生的なものであって<sup>90)</sup>、この時点における議論の核心は、実は引用したところにほぼつくる。馬建忠が問うているのは、けっして日本の要求一般ではない。日本が何を求めて王京に進軍するのか、進軍して何をするのか、にある。竹添進一郎の回答も、日本側の意図を説明し、進軍に対する清朝側の疑念を解こうとつとめてのものだった<sup>91)</sup>。そのやりとりのなかで、馬建忠が現実の日本の目的、日清間の争点をはじめて知ったところに、この会談の意義が存する。

日本側が一刻もはやく王京に進軍したのは、日朝の直接交渉とその速決をめざしたからであり、そのためには、大院君を相手に交渉することも辞さない方針となっていた<sup>92)</sup>。これで清朝本国、そして現地の馬建忠が危惧してきた日本の武力行使は、可能性がかなり低くなったわけだが、それはとりもなおさず、日清いずれが乱党を鎮圧するかではなく、実はそれ以前に、大院君政権を是認するかどうかに、日清間の争点があったことを意味する。清朝側の陸軍派遣は、日本の目的が判然としないまま、前者のような争点を想定して行なわれたものだった。それが見当ちがいだとはっきりするに及んで、陸軍はどう行動すればよいのか。馬建忠はついに、清朝側が実際にはずっとかかえながら、気づかずにいた問題を悟ったようである。

もちろん日本側の動機がそもそも、清朝側に先んじての王京到達、朝鮮政府との直接交渉にあったことは、さすがに竹添進一郎も伏せているし、馬建忠がそれを察知したかどうかともわからない。だが現実には、日本の先着がほぼ既成事実と化した以上、その動機はもはや問題ではない。結果のほうがかえって重要となってくる。馬建忠は依然かわらず、国王の復権が先決だといっているけれども、それは日本に対しては、その進軍を阻止するための主張であったから、ここに至っては、それを執拗にくりかえすより、日本軍入京後の事態も考慮に入れるほうがよい。馬建忠が話題を転じたのも、当然であろう。そこで日本の要求をくわしく確認し、なにかんずく賠償に疑義を出しつつ、朝鮮政府の説得にあたる姿勢を見せたのは、日本が大院君政権と直接に交渉をまとめしてしまうのも、決裂して武力を行使するのも、好ましくなかったからである。それまでの主張はもとより、あらたに入ってきた朝鮮政府の情報<sup>93)</sup>に鑑みても、大院君を除き、国王を復権させ

る方針を、あっさり捨て去るわけにはいかない。さりとてどうすれば、それを実現できるのか、日本側の姿勢を知ってなお、成算があるわけでもなかった。そうしたディレンマのなか、少しでも時間を稼ごうとする苦肉の対応だとみるべきで、馬建忠の本意だったわけではない。

もっとも日本側にすれば、馬建忠のこうした姿勢をみては、清朝側が「朝鮮へ対スル我処置ノフニ付、別段頓着スルトコロ」のない「平穩ノ主義」だと最終的に判断し、楽観的な見通しをもった<sup>94)</sup>のも、無理からぬところがある。それが苦肉の対応でしかありえない、かれ自身の状況と心理を把握できなかったところに、日本側の誤算があった。それはもちろん、馬建忠ひとりに対するものにとどまらない。かれがそのディレンマを解消したとき、今度は日本政府のほうで、清朝・朝鮮関係の対処において、あらたなディレンマを抱えることになる。

## 5. 日清の入京と大院君拉致 ― 8月16日～8月27日 ―

日本側はかくして、当初の方針どおり、清朝軍に先んじて王京に入ることができた。しかし清朝側に対するのと同じ楽観的な感触で、朝鮮政府との直接交渉に臨んだとするなら、見通しはあまりにも甘かったといわざるをえない。

花房義質は馬建忠と竹添進一郎との会談と同じ7月初3日（8月16日）に入京し、表面上それなりに款待をうける<sup>95)</sup>が、その任務となると、容易には着手できなかった。ようやく国王に謁見できたのが7月初7日、要求書を手交し、三日以内に「決答ヲ賜ラン事ヲ」求めて、「相応ノ回答ヲナサシムヘシ」という国王の返答をえたあと、ただちに大院君を訪れ、実質的な交渉に入ろうとした。ところが大院君は、その会談で三日の期限に難色をしめし、翌日その延期を正式に要請する。速決をめざし、しかも「国王既ニ三日ノ期ヲ諾シ」たと思っている日本側が、もちろんそれに応じるはずもない。翌初9日それにもかかわらず、花房義質と交渉にあたるべき専對大臣たる領議政洪淳穆は、「山陵看審ノ命ヲ受ケ」「帰来ノ上ナラネハ相談ニ取懸リ難シ」と申し入れてきた。花房義質はこれを、朝鮮政府が「殆ト絶ヲ示スト言テ可ナル者」だとみなし、翌朝、王京退去をもって酬い、仁川にまで退いて実質的な最後通牒をつきつけ、朝鮮政府の対応をまっ

た<sup>96)</sup>。王京でこのように、日朝間の折衝がはじまり、やがて暗礁に乗り上げるあいだに、馬建忠は逆に、出遅れをとりもどしつつあった。待ちかねた陸軍が本国から到着したのは7月初7日（8月20日）、花房義質が国王・大院君に要求を提出したのと同じ日である。もちろん清朝側はその様子を知るすべもなかったが、とにかく王京にむけ、進軍を開始する<sup>97)</sup>。その翌日、日本の要求書とそれをめぐる議論の写しをそえて、調停を依頼する書簡が、大院君より馬建忠のもとにとどいた<sup>98)</sup>。ここから大院君が日本側に期限延長を求めたのは、馬建忠が到着するまで時間を稼ごうとの企図だったことがわかる。馬建忠のほうはこれで、さしあたり入京する理由づけをえて、ますます行軍を急ごうとするものの、兵の疲労もあって思うに任せない。7月初10日の午前、ようやく王京を目前にしたところで、またもや大院君の書簡に接し、花房義質は退京を決意し、交渉決

裂も辞さないつもりだと知った。そこですぐ趙寧夏に調べさせ、花房義質がすでに王京を退去したことを確かめて入城する<sup>99)</sup>。

こうして馬建忠は、ちょうど日本側といれかわりに入京したことになるが、この日かれがその事実をどう思ったのか、よくわからない。少なくとも記録に残るその言動から、それを読みとることはできない。このあとしばらく、大院君をふくめ朝鮮政府の要人と会談し、日本との交渉に関する情報をあつめた、としか記していないからである。その結果、花房義質の仁川滞留が「一兩日」しかないと知って<sup>100)</sup>、翌11日（8月24日）とりいそぎ仁川にひきかえし、直接かれと会談しようとしたのも、やはり同じ範疇の行動であって、大院君に依頼された調停の任に徹しているように映る<sup>101)</sup>。しかしこの会談を境に、情勢が一変するのは周知のとおりで、したがって馬建忠の真意も別のところにあったことが判明するから、会談の内容はいま一度、巨細にみなおさなければならない。

まずくわしい馬建忠側の記録により、全体をながめておこう。

「あなたは国王が修好を望んでおられると思いますか。金弘集たちの意見はいかがですか」

「国王はご聡明ですから、修好を望んでおられるでしょう。金弘集らは講修官だといっても、実は交渉の権限がありません。かれはひそかに近藤〔真鋤〕にくわが国の近事は、まことに痛哭にたえない」といってました」

「それならあなたからご覧になっても、国王はあなたとの交渉を切望され、大小の臣下も同じ意向なのに、意向はあっても実現に及ばず、こんな局面になってしまっている、とおわかりだと存じます。あなたは＜朝鮮になお政府があるのか＞とおっしゃいますが、さきに船中での言をおぼえていらっしゃるでしょう、＜朝鮮の事勢は、国王の自主を回復できるかどうかを先務とせねばならぬ。国王が自主できない間は、とりもなおさず他国も交渉はできない＞と。主権者は執政の人ではないからです。これを万国公法に照らしますと、トルコ・エジプトでは、反乱軍が各国の人を殺傷した事件が起こったさい、各国はその君主が自主できるようになってから、交渉をしています。わたしはすでに四方より情報をあつめ、国王は何も関与できないことがわかっています。たとえば、あなたがさきに出発されるにあたり、国王に上呈せられた奏文は、国王はまだご覧になっておられない。ほかの者が封を切って、わたしに見せてくれました」

「それは大院君にちがいない」

「説明の必要はありませんね。昨日あなたの書簡を拝読、＜すみやかにご挨拶しお話したいところですが、朝鮮政府が我々との交渉の路を閉ざしてしまったものですから、長く滞在できず申しわけありません＞とありました。今わたしがこちらに来たのは、朝鮮のために間に立って調停しようというのではありません。あなたに朝鮮の事勢を説明し、方針を誤らぬようにしていただくためです。朝鮮国王はいま自主できないのに、あなたは軽率に交渉を進められようとしています。交渉がまとまらねばいわずもがな、たとえ交渉がまとまっても、他日国王が自主を回復されたら、その交渉で決まった事柄は、やはり空談になります。さらに

もしいま決裂されたら、将来おそらく朝鮮政府がこれを口実とするにはとどまりますまい。わが国が今回、軍隊を伴ってきましたのは、ただ乱党の懲罰が目的です。貴国政府もすでにお聞き及びだと思えます。あなたがわたしのいうことをお信じになれないなら、どうぞすぐにでも、乱党と交渉をまとめてください。わたしはおそらく今後、多事になります。ですからこれはあらかじめ申し上げねばなりません」

「貴国の軍が来たのが、もともと乱党の懲罰が目的だとは、わたしも確信して疑うところはありません。しかしわが海陸軍の軍人はみなく貴国は〔日本と〕戦端を開くつもりで、こちらに軍隊を動員して来たのか、さもなくばこの機に乗じて、朝鮮を奪取するつもりではないか」といっています」

「わたしも少しは聞いてます。軍人は無知なものですから、そうした疑いをもつのも、何ら怪しむに足りません。わが国の軍人もくこちらに進軍してきたのは、日本と交戦するためだ」とか、<盛京も軍隊を動員し、朝鮮との境に入っているのは、後方支援のためだ>とかいっています。みな事実に相違する風聞です。かりに盛京が朝鮮との境に軍を動員しているとしても、それは騒乱を防ぐためにすぎません。朝鮮の土地を奪取するとの議論については、わが政府にそんな意思は決してないと断言できます。わが政府の意は、朝鮮がその国を保有し、寸土も失わないよう望み、またその内政外交が自主できるよう願っているだけです」

「わが政府の意も、朝鮮の内政が自主できるよう望むもので、わたしもそうした命令を受けています。しかしそれはきわめて困難です。あなたはどうか解決されるおつもりですか」

「わが軍は着いたばかりで、にわかに策を決定できません」

「実力行使されるおつもりですか」

「わが軍が来たのは、自衛のためにすぎません。貴国の軍隊動員と同じです。もしうまくいかなければ、実力行使もやむなしでしょうか」

「実力行使される必要があるなら、わが軍も援助いたします」

「実力行使にはおよばないでしょう。万一そうなるなら、そのときあらためて、あなたとじっくり相談しましょう」<sup>102)</sup>

以上が7月11日の会談で、花房義質が翌日、馬建忠を答訪したさいの議論は、次のとおりである。

「今回お訪ねしたのは、朝鮮の国勢を説明し、後日の解決の足がかりとしようとしただけです。しかしあなたはいま、どんなお考えをお持ちですか」

「なお仁川にて二、三日まつつもりです。もし朝鮮政府が大官をこちらに派遣して協議しないのなら、後事がどうなるかと言ひ難いものがあります」

「昨日あなたに、朝鮮政府は有名無実だ、と説明しました。たとえ大官を派遣しようと、交渉する権限などありません。もしそのために決裂となるのなら、人の乱につけこむにひとしいではありませんか」

「朝鮮にもし政府がないとすれば、その内政を変革せねばなりませんまい。それもだめなら、武力に訴えねばならぬのは必至です。あえてお尋ねいたします、わが国がこの挙に出たら、

他国が妨げることはありましようか」

「貴国と朝鮮とは対等の與國ですから、内政に干渉などできません。これはわたしがさきに申し上げました。もし武力に訴えられるのであれば、他国がこれを阻むかどうかは、その国が朝鮮とどのような関係にあるかによります」

「それでは、貴国が朝鮮の内政を変革するおつもりですか」

「もしやるとすれば、本来の姿にもどして、国王に自主できるようにするだけです。これを変革とはいえますまい。朝鮮政府が最後まで大官を派遣しないばあい、あなたはぎりぎり何日間ご滞在になりますか」

「三、四日にすぎません」<sup>103)</sup>

馬建忠は11日の筆談で、自軍の到着に言及し、日清開戦という互いの懸念を打ち消しつつも、このときはじめてその目的が「乱党の懲罰」にあると明言した。花房義質はこれには了承の返答をするいっぽう、翌日の筆談で、清朝による「朝鮮の内政」「変革」に反対している。このあたりに、馬建忠の作為があるようにみうけられる。少なくとも花房義質がみずから、「乱党の懲罰」と「内政」の「変革」とに賛否を使い分けたとは思えない。日本側からすれば、両者は同一事だからである。花房義質はかなり時間が経過した後ではあるものの、

清国馬建忠等陸兵ヲ率ヒ入京翌二十四日……義質ノ既ニ去ルヲ聞キ続テ馬ヲ飛シ仁川ニ來リ姑ラク行期ヲ緩フシ共ニ議シテ先ヅ朝鮮国乱ヲ整理シ漸ク善後ノ図ヲ為サン事ヲ勸ム此議ヲ容ルトキハ特ニ曠日ノ患アルノミナラス彼ノ此間ニ干渉スル漸ク深キヲ致サン事ヲ慮リ謝シテ別ル（此日近藤書記官京城残務ヲ取纏メ館舎ヲ彼ノ官吏ニ引渡シ濟物浦ニ還レリ）翌二十五日花島（濟物浦ヲ距ル事半里）馬建忠ノ旅館ニ就テ答拜シ遠來ノ勞ヲ慰シ且昨日ノ言ニ答ルニ我ハ先ヅ我要求ノ応諾ヲ得サルヘカラス而シテ他国ノ其間ニ入ルヲ欲セサルノ意ヲ陳シ朝鮮若シ今明日ノ内大臣ヲ派シ此地ニ來ラシメハ談猶緒ニ就クヲ得ヘキヲ示シ且ツ説クニ朝鮮ノ内事ハ朝鮮ヲシテ自ラ整理セシムヘク他国ノ干渉スヘカラサルノ理ヲ以テス彼頗ル難ンスルノ色アリ兎角其意ヲ朝鮮ニ知ラシムヘシト云テ京ニ帰ル<sup>104)</sup>

と報告した。ここでは「国乱」の「整理」が「乱党の懲罰」に、「内事」の「整理」が「内政」の「変革」に対応し、いずれも「整理」という概念になっている。清朝がこの「整理」を行えば「干渉」にはかならず、それこそ日本側のもっとも恐れるところで、花房義質の主観では二度の会談ともに、「干渉」を導く「整理」のしかたは拒否したつもりだった。ところが馬建忠のほうには、12日の筆談末尾の発言に明らかなように、「内政」の「変革」は日本も受け入れまいが、「乱党の懲罰」ならさしつかえない、国王の復権は後者に属す、と記録しているわけである。日付は食い違うが、花房義質の別の報告にも、それに対応する一文が見いだせる。

馬ノ意頗ル居中停調ヲ為サント欲スルノ口氣アリ我乃訓示ノ意ヲ照シテ之ヲ謝却シ且韓廷ノ亡狀ナルヨリ終ニ京城ヲ去ルニ至ルノ由ヲ略々説明ス馬ハ専ラ整理シ院君ヲ斥クルノ意アルヲ以テ姑ク我行ヲ緩クセン事ヲ勸メ且韓廷ノ内政ニ干渉スルト雖モ友誼ヲ以テスルニ止リ属国ヲ以テ遇スルヲ為サス等閑話数時ニシテ帰ル<sup>105)</sup>

「韓廷ノ内政ニ干涉スル」といいながら、それが「友誼ヲ以テスル」だけで「属国ヲ以テ遇」しないものだと記すのは、ことさら「乱党の懲罰」と「内政」の「変革」とを分別し、前者に賛同を求める馬建忠の発言を、日本側が自分なりの発想と語彙にもとづいて要約したものでしょう。日本側からみて、そんな論理が成り立つかどうか、あらためて問うまでもない。「閑話」と言い捨てるのも、そのためである。したがって花房義質が、馬建忠の論法とその意図に気づかなかったわけではなく、かりに馬建忠の言い方に応じ、「懲罰」と「変革」と個別に回答したとしても、両者ともに拒否した蓋然性は高いと思われる<sup>106)</sup>。もっともそれが馬建忠に伝わったかどうか、またよしんば伝わったとしても、かれを動かさうるものだったかどうかは、おのずから別問題である。

客観的にみると、入京の前にくらべて、馬建忠の劣勢挽回は明白だった。かれのかねてよりの主張は、変更する必要がなくなったばかりか、日本側に同調を強いることさえ可能となっていた。それが軍隊を背景にして空論にとどまらぬ力をもったのみならず、交渉の行きづまった日本側にとっても、にわかに説得力あるものになったからである。日本側はみずからもちかけた交渉を、朝鮮政府が一方的に途絶せしめたという立場だから、その態度が変われば、朝鮮に対する武力行使を正当化する根拠はなくなり、交渉を再開せざるをえない。清朝側としては、大院君の政權掌握はみとめず、なおかつ日本に武力を行使させないという立場だから、国王の復権と朝鮮政府の態度をあらためることとが同義になれば、少なくとも日清間では、妥協の成立が不可能ではなくなる。11日の筆談の前半部分から、馬建忠もそう考えたことがうかがえよう。

それならその線で、花房義質が会談で実際に承諾したかどうかにかかわらず、馬建忠が行動を起こしたとしても、何ら不思議ではない。むしろ日朝間が完全に決裂してしまう前に、花房義質が仁川に滞留するあいだに、行動を遂行せねばならない。会談の目的は花房義質を説得するよりも、日本側の態度と動きをさぐり、最大限いかほどの時間が残されているかを見きわめるにあったとさえいえよう<sup>107)</sup>。問題はそこで回答をえた「三、四日」のうちに、日本側から黙認を取りつけるよう、事後にも不満が出ないよう、処置するにある。さもなくば、日本が武力に訴える可能性は残るし、そうなったばあい、清朝本国もさすがに、日本とことをかまえる決意まではしていないからである。

このように考えてくると、なぜ馬建忠が翌日（7月13日）、ただちに大院君拉致を決行したのか、それから時をおかず（7月14日）、朝鮮政府があらためて、李裕元・金弘集を全権大官・副官に任命し仁川に派遣、花房義質と交渉させたのかも、すぐ了解できよう。馬建忠のなかではすでに、清朝・朝鮮間での大院君排除と日本・朝鮮間での交渉再開とが不可分にむすびついていたから、この二つの事実はけっして別個の出来事ではなく、むしろ表裏一体だというべきである。その意味では、馬建忠が身をもって大院君を拉致した有名な事件もさることながら、事前に趙寧夏と魚允中を前後して、朝鮮国王のもとに遣わしていた事実こそ、注目しなければならない<sup>108)</sup>。これはあらかじめ、朝鮮国王に大院君拉致の決行を知らせて、万一の事態に備えると同時に、朝鮮政府がその後、どう動けばよいか、馬建忠の指示を伝達させたものだろう<sup>109)</sup>。そう考えなけ

れば、これほど敏速な全権の派遣は理解できない。

そして清朝側のこうした行動に容喙する隙を、日本側に見せてはならない。日朝間の済物浦条約交渉にあたり、馬建忠が日本の要求に対し、金弘集に逐条、交渉の指針を与えるにとどめ、あえて王京から動こうとしなかったのも、そのためであろう。

こうした対応から逆に、花房義質が会談のさい、馬建忠の示唆した清朝側の行動に、全面的な支持を与えていなかった事実もうかがうことができる。花房義質がそれにもかかわらず、済物浦条約の交渉に応じたのは、かれの設定した期日のうちに、朝鮮政府が交渉再開を希望し<sup>110)</sup>、ほどなくかれの要請どおり、全権を派遣してきたばかりか、馬建忠も「居中停調」しようとしなかったからである。かれの立場では、朝鮮との交渉速決と清朝との衝突回避が当初からの任務であり、とにかく朝鮮政府との直接交渉となっているうちに妥結したほうがよい、さもなくば清朝側が軍隊を王京にすすめた以上、その干渉は時間がたつにしたがい、深まりこそすれ、弱まることはありえない、と判断せざるをえなかった<sup>111)</sup>。日本側も不満は残しながら、結果的に馬建忠の処置を黙認するかたちとなったことで、事態は一転、收拾へむかって動き出すのである。

## 6. 壬午変乱と馬建忠の朝鮮政策

馬建忠は7月14日（8月27日）、大院君を天津に護送する軍艦登瀛洲に託して、張樹聲・李鴻章に報告書を送付した。記録に残るものによるかぎり、張樹聲にあてた報告は、日付がその前日の7月13日で、大院君拉致を執行するまでの、日を逐った復命<sup>112)</sup>なのに対し、李鴻章への報告は、その後のあらましを記しており、両者あわせて、援軍の要請から大院君の拉致に及ぶ事実経過がわかるようになっている。いずれも清朝側に不都合な事実を適宜、削ぎ落として手堅く経過を伝えるものだが、後者は李鴻章がほどなく北洋大臣に帰任するのも見越したためか、今後の展望にも説き及び、「乱を定めたのちは、朝鮮国王はきつとますます奮起をはかるでしょう（其國王必益圖振作）」という<sup>113)</sup>。これだけなら、内乱を平定した後の、朝鮮政府の大づかみな態度の変化を、たんに予想したとしかみえないが、実はそうではない。

馬建忠は大院君を拉致しおえると、ただちに朝鮮国王の側にある趙寧夏と魚允中に書簡を送り、大院君拉致の「事状を述べ」とともに、朝鮮政府が「應に舉行すべき者六事を定めて」、国王に「密呈」させた<sup>114)</sup>。趙寧夏が翌日、馬建忠のもとにもどってきて、ひそかに「国王の感謝の意」を伝えている<sup>115)</sup>から、その「感謝」の対象には、大院君の排除のみならず、「應に舉行すべき者六事」の呈示も含むだろう。この日に書かれた李鴻章への報告にいう「ますます奮起をはかる」とは、したがって国王が「應に舉行すべき者六事」を受理した事実を指していったものとみてよい。その四日後の7月18日の夜、趙寧夏はふたたび馬建忠を来訪し、自分が中国奉使の「大官」、金弘集が「副官」に任ぜられ、馬建忠の帰国に同行して天津に赴き、李鴻章らに謁見して「事を言う」よう命ぜられたと、あたかも以前から検討されてきた人事、任務であるかのように告げている<sup>116)</sup>。馬建忠は同じ日、ふたたび李鴻章に報告書を作成するにあたり、趙寧夏らの中



国派遣を、朝鮮国王が「つとめて奮起せんことをはかって（力圖振作事宜）」決めたものだと書いている<sup>117)</sup>が、実際に趙寧夏が天津で、李鴻章に「事を言」ったのが、いわゆる「善後六條」なる改革案の提出である<sup>118)</sup>。つまり「善後六條」が、国王の「奮起せんことをはかつ」た行為の具体的な内容に相当する。同じ「奮起をはかる」という表現で、7月14日の報告書は「應に舉行すべき者六事」を、18日には「善後六條」を寓意しているところから推して、「善後六條」の原型は、馬建忠の手になる「應に舉行すべき者六事」にほかならないとみなすことができる。

ここからわかるのは、馬建忠が大院君拉致から時を移さず、朝鮮と清朝の関係再編に着手している事実である。「善後六條」をめぐる双方の協議ととりきめは、朝鮮の対外関係を方向づける重要な契機をなすが、それはそもそも、壬午変乱の収拾と抱き合わせた馬建忠の企画に、端を発するものだったのである。

それならかれは、このときはじめて「應に舉行すべき者六事」を思いついたのか、といえそうではない。「善後六條」の全体的な構想は、直接には遅くとも5月14日（6月29日）、朝鮮国王が内密に諮問した「内政・設關・開港・電綫・採礦」の諸点に対する馬建忠の回答にまで、さかのぼることができるからである。これを便宜上、四つのパラグラフに分けてみよう。

(1)仔細に考えますと、内密に諮問された諸点はきわめて重大なものですから、わが傳相〔李鴻章〕に内密に申し上げたうで、代わりに決定するという手はずでないといけません。しかしその主要なところは、概略を申し上げてもいいでしょう。第一点に「外交にあたっては、内政を優先する」というのは、まさに肯綮に当たっております。蘇洵が「憂の内に在る者は、本なり。憂の外に在る者は、末なり」というとおりです。いま貴国が西欧の諸大国と条約を締結したのは、強大な隣国たる日本のねらいをくじこうとしたものにすぎません。これは応急のてだてであり、「憂の外に在る者」に相当します。国民は貧困で、商務は興らず、官職は有名無実になっている。これが「憂の内に在る者」に相当します。

(2)わたしは貴国に二度まいりまして見ましたところ、民情は純朴温厚で、土地は肥沃なのに、国庫の蓄えは不足し、利益を興すにもすべがないありさまです。おそらくは「均しからず」という過ちではないでしょうか。孔子のいう「貧しきを患へずして、均しからざるを患ふ」です。それを均しくするには、物貨が流通して滞るおそれをなくすればよろしい。その手だては民の利に即して、大いに禁防を除去し、民がみずから生計をたて、みずから利益をもとめることができるようにするにあります。人の上に立つ者が、ただ民のために害を除き、鼓舞する方法を考えさえすれば、民は知らず知らずのうちに農桑・交易に励むようになります。古人も「善き者は之に因る、其の次は之を利導す、其の次は之を教誨す、其の次は之を禁防す、最も下なる者は之と争ふ」といっておりまして、およそ法の網をはりめぐらし、民に自主できないようにするのは、例外なく「禁防」して「之と利を争ふ」ものに相当します。民が自分の利益を追求して、飽食煖衣することができれば、それに楽しみながら、不法を行って犯罪を犯すことなどありえましょうか。だから孟子もいうように、「恒産ある者は恒心ある」わけで、まったくそのとおりでしょう。「民苟くも自足せば、君孰と與にか足らざら

ん」。西洋各国もはじめのうち、やはり禁防を多く設けて、民は安んじて生活ができませんでしたが、後にその方針を一変させて、この苛政を除き、民に自主できるようにすると、国が富み兵は強く、内外ともに憂はなくなりました。世道に注意していれば、やはり治世をもたらす根本のところがわかるのです。

(3)禁防を除去したら、学校を開くのがよろしく、それで人才を養成します。人才が得られたのちに、官職を変革すればよろしい。衣服については簡便にするだけでよく、日本人にならない、西洋人の服装を猿真似して物笑いになる必要はありません。軍隊養成の方法については、役に立たない者を淘汰し、精鋭を残すことにあります。法律を定めることこそ、もっとも重要で、それには大いに禁防を去ることから始める以外にありません。

(4)開港・設関にあたっては、それを担当する官吏を設置する。これは実施せねばなりませんが、電綫・郵通は急ぐことではありません。商務がさかんにあったあかつきに、水がくればおのずと堀割ができるようなものですから、くれぐれも日本人のように、何もかも西洋のやり方を盗んでくるのに倣ってはなりません。日本は今や電線・汽車を設置するまでになっていますが、国庫は空になって、張り子の虎状態を嘆く識者さえいるほどです。……鉾山採掘は理財の一法ではあっても、理財の急務ではありません。採掘の方法と手順、それから採掘にあたっての資金集めについては、以前こまかに申しあげましたから、あらためてくりかえす必要はないでしょう。<sup>119)</sup>

朝鮮側が諮問した論点とつきあわせると、馬建忠は全体を「内政」と「設関・開港・電綫・採礦」とに大別し、前者に(1)(2)(3)、後者に(4)をあてる。前者は「内政」の重視を導く(1)をまず前提とし、(2)に移って、現状とその対策を提示する。これが議論の中軸で、思わしくない現状は「均しからざる」ことが原因だと指摘し、その是正を妨げるものとして、『史記』貨殖列傳の一節を引きつつこれに手を加えて、独自の「禁防」なる概念を提示する。その除去がしたがって「内政」上、一貫した方針となるわけだが、それが及ぶ領域を、各論として(3)に展開し、人材の養成、官職・衣服の改革、軍隊の整理、法律の制定という項目をあげる。それに対し、「内政」よりは「外交」条約締結に直接かかわる「設関・開港・電綫・採礦」の論点は、(4)でそのままそれぞれを取捨している。

いっぽう「善後六條」は、「民志を定む」「人才を用ふ」「軍制を整ふ」「財用を理む」「律例を變ず」「商務を擴ぐ」という六カ条からなる。そのうち壬午変乱の発生をうけた総論として、第一に掲げる「民志を定む」の条を除くと、おおむね(2)(3)(4)を下敷にしたことがみてとれる。第二の「人才を用ふ」と第三の「軍制を整ふ」は、(3)があげた項目をそのまま踏襲したものである。その具体的な内容は、5月14日の回答に記していないけれども、(2)の論旨にしたがって、あとから補ったとも考えられる<sup>120)</sup>。第四の「財用を理む」は、朝鮮側の諮問にも馬建忠の回答にもなかった論点・項目で、国内財政を論じているから、一見無関係のようだが、「礦務も理財の一法」という一節があり、(4)の下線部の表現と一致する。この条全体がおそらく、その「理財」を手がかりに展開した文章であろう。

馬建忠の回答ともっとも深い関連がうかがえるのは、「律例を變ず」「商務を擴ぐ」の二条である。

律例をあらためる。あらゆる施策は、まず信を民に立て、大いに禁防を開き、それによって民の害を除去するものでなければならない。しかるのちはじめて民は、生を楽しみ利に趨ることができる。ただし法の執行は、まず国王側近の貴顕より始めなければならない。コネによる昇進を厳しく閉ざし、いささかもおめずおくせず、宮中を肅正し、情実を一掃する。あらゆる内容空疎な法律で、虚名に拘われて実害を招くものは、いっさい撤廃して、簡素化につとめる。また公私の衣服は、名目が繁雑で朝士の儀礼・職務にも向かなければ、つくりも機能的でなく賤者の事務・作業にも向かない。公金を費やし政務を害しているのは、もっぱらこれが原因である。おそらく中国の制度を参酌して、改正してゆくのが適切だろう。

この条は(3)がもっとも重要だとする項目に一致し、前半に記す「禁防」除去との関係も、(2)との関連を語る(3)末尾の一文を祖述したものである。後段にいう当面の対策をみても、「衣服」を論ずるくだりは、やはり(3)があげた項目に対応している。

商務を擴ぐ。小邦はすでに各国と通商することになっているが、全国上も下も商務の重要性がいかなるものかまったくわからない。けだし小民に教え諭しうまく導くには、禁防を除去し、商局を設けるにしくはない。わが国にはもともと、政府が商品流通を管理課税するという制度はなかった。しかし最近では綱紀が弛み、豪強な大族や姦悪な寵臣が勢力を恃んで恣に、商路を妨げ人民を虐げている。まずこの悪習を根絶しないと、商局も設けることはできず、禁防も除去することはできない。いま埠頭の建設・税関の設立は、期限がすでにきている。それにもかかわらず事變の後とあって、着手のしようもない。これが目下焦眉の憂慮であるから、やはりその任務を担当する人物を招請雇用しなければならない。しかるのち自主を失わないことも可能となる。

この条は(3)にあがった項目ではなく、(4)を論じようとするもので、「禁防」除去の効果として「商務」の拡大を出し、(2)との関連から「通商」を導く文章となっている。後半で喫緊の課題としてあげる「埠頭の建設・税関の設立」は、(4)で朝鮮側の諮問に馬建忠が必要だと答えた項目に、そのまま対応する。

「善後六條」の起源が馬建忠の回答にあるということは、このように内容の上からわかるにとどまらない。諮問と回答の筆談があった5月14日は、朝鮮がドイツと条約を締結するさなかで、その朝鮮側全権は、ほかならぬ趙寧夏と金弘集だった。朝鮮国王の諮問をとりついだのも趙寧夏であって、馬建忠の回答と「善後六條」とは、人脈の面でも接続する。馬建忠がこの条約締結を見とどけて帰国したのち、第1節にふれたとおり、安徽に赴いて李鴻章に面会しようとしたのも、実は5月14日の筆談を上申し、協議するためであった<sup>121)</sup>。それが壬午変乱の勃発で果たせなかったのも、その收拾を機会に、趙寧夏から直接「善後六條」を提出させるかたちで、あらためて李鴻章との協議をもとうとしたものと思われる<sup>122)</sup>。

ところで5月14日の馬建忠の回答も、その日に突然、かれが着想したというわけではない。あ

らかじめ考えを練っていたものだった。ドイツとの条約締結に立ち会うため、朝鮮に向かう直前の5月初1日（6月16日）、かれは天津で金允植と次のような筆談をかわしている。

「貴国は土地が肥沃で、民心も馴良です。もし商務を開発拡大し、その指導によろしきを得れば、十年もたたぬうちに、必ず富庶の国となりましょう」

「わが国は新羅・高麗の時代には国境に紛争も多く、日々戦争状態が続きましたので、富強の実がありました。ところが現在は久しい太平のすえ、わけのわからないまま、次第に貧弱となりましたから、奮起のしようもなくなっています」

「＜寡きを患へずして均しからざるを患ふ、貧しきを患へずして安んぜざるを患ふ＞。均しいと安んじるとの道は、王者が公平を持し無私となり、大臣が国を治めるに潔白となり、一利を興し一害を除くこと、人を水火のなかから救うように実行するにあります。そうすれば人民はおのずから、均しく安んずるようになります。均しく安んずれば、富庶となります。民が富んで国が貧しかったためしはありません。いま世界各国は、民を富ませることを推進しています。国家はおのずとその利益を享受するからです」<sup>123)</sup>

前後二つある馬建忠の発言は、それぞれ「商務」から「富庶」へ、「均」「安」から「富庶」へという因果関係を設ける。結果は「富庶」で両者一致するけれども、このままでは「商務」と「均」「安」が連絡しない。そこで「商務」と「均」「安」のあいだに「禁防を去る」という媒介項を設けて、論旨を一貫させ敷衍すれば、5月14日の回答、なかんずく(2)となるわけである。だからそれが朝鮮国王の諮問に答える形式ではあっても、事前に馬建忠が考えていたのは明白だし、朝鮮国王の諮問じたいも、かれの示唆によった可能性すらある。5月14日の諮問・回答のうち、少なくとも開港・設関・鉱山の論点は、シューフェルト条約締結直後に、金弘集と協議したことが記録にみえており、遅くともその時点で、馬建忠の頭のなかに胚胎していたといえるからである。なかんずく「採礦」に対し、馬建忠が「以前こまかに申し上げました」というのは、その金弘集との協議を指した<sup>124)</sup>もので、そこに両者のつながりを見いだすことができよう。

こうして考えてくると、一瞥しただけなら、壬午変乱収拾の所産、朝鮮側独自の提案に映る「善後六條」は、馬建忠がシューフェルト条約以来、朝鮮に打ってきた布石の連続だということになる。その当初、かれが打ち出した方針は、朝鮮の「属国自主」を標榜しながら、日本を主敵と仮想して、「属国」の実を明らかにすべく、その「自主」は有名無実化してゆくにあった<sup>125)</sup>。それなら「善後六條」も、そうした方針を具体化する一つの結論にほかならない。「善後六條」は作成も提出も、さらには来るべきその実施も、表向き朝鮮側の「自主」による。しかしその背後には、「属国」の強化をめざす馬建忠の意向がはたらいていた。そうだとすれば、現実には趙寧夏らが清朝側と「善後六條」に関連したとりきめをむすぶにあたり、馬建忠がほぼ例外なく参画しているのもうなづけるし、そこで合意をみた施策が、いったん実行に移されると、清朝側にとって「属国」を強化するよりどころとなってゆく事実もまた、容易に理解できるであろう。

## むすび—— 済物浦条約と馬建忠の退場 ——

大院君を拉致した果敢な処置と日朝間を調停した老練な外交。壬午変乱の馬建忠像は、通説ではおよそこんなところだろう。それが誤っているというのではない。けれどもそういいきってすむほど、かれが現実には置かれた状況は、容易なものではなかったし、以後に与えた影響も、小さいものではなかった。

壬午変乱そのものが、朝鮮史の軌道ではいざ知らず、清朝にとってはそもそも予期せぬ事件だった。ひとり馬建忠のみに限ってみても、それまで二度にわたり朝鮮に赴き、ひそかに日本こそ諸悪の根源だと見定めて、米・英・独と条約を結びつつ打ってきた布石が無に帰しかねない事態であった。しかも一方の当事者であり、かつ敵視する日本の出足は敏速で、三たび朝鮮にやってきたかれは、たちまち窮地に立たされる。かれの朝鮮側、日本側との折衝は、予断を許さない情勢を臨機応変に判断し、少しでも事態を好転させようとつとめた、手探りさながらの試みにほかならない。

そうしたなか、趙寧夏らとの再会、日本側と大院君の交渉の不調、花房義質の退京など、かれの与り知らぬ、ほとんど偶然としかいえない断片的な出来事をつなぎあわせて、朝鮮に対する日本の武力行使を回避し、清朝をまったく介在させぬ日朝の直接交渉をも未然に阻止するとともに、清朝と朝鮮の関係再編を、壬午変乱以前のみずからの構想に接続させ、実行に移すところまで、どうにかこぎつけた。かれの手腕を評価するなら、そのあたりにまで、眼をくばるべきであろう。

馬建忠は結果として、日本には対立を表面化させない「平和主義」をとりながら、朝鮮に対しては具体的な内政干渉に着手したことになる。こうした行動それじたい、かれがさきに新たな定義を与えた「属国自主」に対応するものだった。すなわち、ひとまず「平和主義」で、日本と折り合っておくに、朝鮮の「自主」を以てし、朝鮮に事実上、内政干渉を施してゆくには、清朝の「属国」を以てした。それまで朝鮮の独立自主を当然視していた日本側の立場からすれば、馬建忠はおよそ矛盾するほかない二事を同時にやってのけたわけで、日本政府は以後、対朝政策をすすめるにあたって、ひさしくそのはざまで逡巡せざるをえなかった<sup>126)</sup>。これを客観的に、東アジア国際関係史の文脈でみなおすなら、すでに始まっていた清朝・朝鮮間の関係再編が本格化し、日本もようやく、それを肌で感じるようになり対応を迫られてゆく、とまとめることができよう。壬午変乱における馬建忠の役割は、そうした展開をもたらしたところに意義を有する。

だからといって、壬午変乱がまったく馬建忠に不満なく収拾されたのかといえ、それは自ずから別の問題である。かれは7月18日（8月31日）の夜、ふたたび李鴻章に報告書を認めた。前回の送付が14日だから、今回はそれ以後の経過、具体的にいえば、済物浦条約の交渉と締結を報告するものとなるはずだが、少し趣が違う。

〔7月〕13日に大院君を拘束したあと、すぐ国王に、あらためて旧好を修めたいとの意向を、朝鮮政府から日本公使花房義質に書簡で通知するよう、お願いした。国王はそこで翌14日、全権大官に李裕元、副官に金弘集を任命派遣し、仁川に赴いて交渉を行なわせることとする

いっぽう、同日の昼、あらかじめ戸曹尚書金炳始に命じ、日本の要求書を携えてわたしの宿舎にきて指示を求めさせた。そこでわたしはただちに、日本の要求条項をそれぞれ、認めてもよい条、認めてはならぬ条、修正すべき条に分け、とくに「第四条の軍費賠償は、力のかぎり抵抗すべきだ。同時に、後ろ盾があるから日本は恐るるに足らず、との態度を暗に示して、日本の威圧的な態度をくじけば、万事うまくまとまるだろう」と回答しておいた。その夜、金弘集が宿舎に来たので、かれと筆談し、ふたたび全体にわたって一つ一つ詳細に指示を出した。翌日、弘集らは仁川に赴いた。17日、弘集から書簡がきて、「花房は八方手をつくして強要してきた。あなたが仁川にいらっしゃらず、直接ご指示をあおげず、心ならずも交渉をまとめてしまったのは恨めしく、死ぬほど恥じ悔いてます」とあった。とりきめた条約の概要を列挙する文書が同封してあったので、見ると各条おおむね、わたしがもともと出していた指示とそんなに隔たりはない。ところが賠償のみは、これを填補といいあらため、なんと五十万円の額を認めていた。

わたしが伏して思うに、このたびの日・朝の紛争で、日本側は海陸両軍を朝鮮に集結させ、城下の盟を朝鮮に要求した。当初、朝鮮の臣民は岌岌として危く、一日も過ごしていられないありさまだった。まことに総理衙門の憂慮したように、内乱がおこったばかりか、外敵もせまり、事態は危急で、日本人に制せられざるを得ない趨勢にあった。しかもアメリカの軍艦も朝鮮にきて、やはり「各国の岡目は一致して、日本が朝鮮を力づくで服従させようとする事、今にはじまったことではなく、今回は出兵に名分があるのだから、必ず領土割譲を要求せねば終わるまい、との観測だ」と言っていた。はたして花房が漢江に急行してきたが、中国の軍艦がさきに着いていたため、はや意気は殺がれていた。このとき丁提督はすでに威遠に乗り、援軍要請に向かっており、港に停泊しているのは、超勇・揚威の二艦しかなかったけれども、わたしは船中の士卒に、平静にふるまうよう指示した。花房と会談したときも、ふたたびかれに「中国はまもなく水陸大軍がやってきます」といい、表向き「乱党を排除する」といいながら、言外に「属国（藩封）を保護する」意思を示すと、花房の語気はますます平和的になってきた。初3日、竹添進一郎がわたしの船にきて、筆談したときについて「島嶼割譲の要求は、日本政府はけっして考えていない」と口にし、くわえて軍費賠償に言及した。わたしがかれにくりかえし反論すると、かれもあえて自説に最後まで固執しようとはしなかった。そして花房が王京に着いて提出した七カ条の要求書にも、領土割譲にはふれず、軍費賠償もいくらかは言及しなかった。もしこのときすぐ、日本と交渉をまとめていたら、七カ条のなかには、きっと議論修正できるところも多かったにちがいない。だが日本側の設定した期限がきても朝鮮側は回答せず、またもや決裂となるに及んで、花房はふたたび、〔領土割譲を〕要求しようとするようになった。そのためわたしは漢城に到着すると、翌日すぐ、仁川に急行し、かれに大義をさとし、あわせて「わが政府は朝鮮を保護し、絶対に寸土も失わせない」といい、こうしてあらかじめかれの奸謀を封じようとした。14日になって、金弘集が仁川に行き花房と交渉することになったが、この日はわたしはちょうど呉軍門

(呉長慶)と乱党捕獲の協議をしていたところなので、金弘集にひそかに指示を与えるだけにしておいた。15日、乱党の件がひとまずかたづいたので、すぐ仁川に急行し、金弘集とともに主張しようかとも思ったが、日本側がこのたび条約交渉で、多大な要求をもちだしてくるのは必至で、もし中国があからさまに表にでて主張し、同時に花房の固執がもしこれまでどおりだったばあい、こらえて譲歩しようものなら、大いに国威を傷つけるし、だからといって、譲ろうとせず決裂に至ろうものなら、たちどころに戦端が開かれるだろう、と思い直した。だからこのまま王京にとどまって静観し、万が一のことがあったなら、そのときあらためて横から調停に乗り出すことにした。ところが朝鮮国王は、内憂がやっと平定されたばかりなので、外患がまた起こってはたまらないと深く恐れており、弘集らはこの国王の意を深く体したから、やはり日本の脅迫をうけ、草卒のうちに調印してしまったのである。

伏して思うに、日本と朝鮮のこのたびの紛争では、軍隊もうごかさず、領土割譲も免れ、内地の通商も始めなくてよく、わずかにこの五十万円の軍費を、賠償ではなく補填といいあらためて出すこととなった。これを日本側が言いがかりをつけ要求しようとしていた心づもりと比べれば、すでに重きを避け軽きに就いたというべきだろう。しかし朝鮮の貧瘠はもとよりひどく、かさねてこんな出費を増やさせては、反省自問して、自責の念はまことに深いものがある。いま金弘集らは、すでに仁川からもどってきており、交渉はもう終わったのだが、朝鮮国王は積弱に鑑み、つとめて奮起せんことをはかって、趙寧夏・金弘集・李祖淵に命じ、わたしと同行して中国にゆき、憲台〔李鴻章〕に面会して、ご教示を求めたいと願い出たので、時をおかず20日には、船にもどって帰国するつもりだ。こちらで治安維持にあたり、ひきつづき乱党を追捕するなどのことは、呉軍門が軍隊を統率してこちらにいますので、わたしがいなくとも臨機に処置してくれましょう。<sup>127)</sup>

経過を復命するつもりなら、第一段の趣旨だけで足りる。しかしそうはいかない事情があった。第一段末尾にいう五十万円の賠償金のくだりがそれである。

実質的に一人で花房義質との交渉にあたった金弘集から、7月17日(8月30日)に書簡で<sup>128)</sup>、18日には直接に会って<sup>129)</sup>知らされた済物浦条約の内容は、馬建忠が考えていたより、はるかに朝鮮側に不利なものだった。金弘集が花房義質の強硬姿勢に抗しきれず、日本の要求をほとんどそのまま、呑まざるをえなかったからである。馬建忠はあらかじめ金弘集に指示を与えるにさいし、花房義質がこうした強硬姿勢に出るとは予想しなかったらしく、むしろかれがそれまでと態度をかえたとさえみている。その典型がこの巨額の賠償だった<sup>130)</sup>。馬建忠がことさらさかのぼって、日本との交渉の沿革を叙述する第二段を挿入せねばならなかったのは、李鴻章の読解の便をはかるほかに、自分の見通しが甘かったと悟った<sup>131)</sup>からでもあろう。そこで日本の「心づもり(始意)」はむしろ、朝鮮の領土割譲を要求するにあったという虚構<sup>132)</sup>を設け、領土割譲を阻止し、なるべく要求を軽減した結果、五十万円の賠償に落ちつかざるをえなかったという論理をくみたてて、自分の立場の正当化をはかろうとしたのである。

そればかりではない。馬建忠はこれにつづく第三段で、前節にもふれたように、朝鮮国王が

「つとめて奮起せんことをはか」る趣旨を付け加えている。これは金弘集との会談と同じ日、趙寧夏が中国奉使の内定を通知したのに乗じ、不利な条約にならざるをえなかった理由として、たくみに朝鮮の「積弱」を織り込み、済物浦条約の締結と「善後六條」の提出とを連関させようとしたものである。朝鮮に不利な条約だといっても、それが清朝にも不利だとは限らない、むしろそれを転じて、清朝が日本の圧迫から保護してやる名目に用い、朝鮮との関係再編をいっそう円滑にしようとする、馬建忠の周到な配慮がうかがえよう。馬建忠の報告はこのように、済物浦条約締結に対する弁明であると同時に、「善後六條」の提出にいたる自分の企図を正当化しようというものでもあった。

李鴻章はこうした馬建忠の言い分をそっくりうけいれた<sup>133)</sup>。しかし関係者すべてが納得したわけではない。その最たるものが、呉長慶との対立だった。壬午変乱収拾の過程でいつ、馬建忠と呉長慶との溝ができたか、明らかではないし、二人が表だって反目しあった形跡もみえない。けれども確実にいえるのは、7月22日（9月5日）に馬建忠が朝鮮をあとにしてから、呉長慶の部下、張謇や袁世凱が口をそろえて、馬建忠を批判しはじめたことである。その真意はどうやら別のところにあるとおぼしいが、少なくともこの済物浦条約、賠償金が批判のきっかけとなり、最大の材料でありつづけてはいる<sup>134)</sup>。

そしてそうした馬建忠への批判は、かれを庇護する李鴻章への批判にまで発展し<sup>135)</sup>、清朝本国のいわゆる清流派がこれとむすびつき、公式に馬建忠が弾劾されるのみならず、李鴻章の朝鮮政策そのものが批判されるに至る<sup>136)</sup>。もちろんそこには正鵠を射ていないところが多く、李鴻章もその点を逐一とりあげて反駁した<sup>137)</sup>ので、朝鮮政策の変更を迫られることはなかった。けれども朝鮮に駐留する呉長慶軍のみならず、北京でさえそうした空気が濃厚となつては、朝鮮側の希望<sup>138)</sup>にもかかわらず、もはや馬建忠その人を朝鮮に派遣することはおろか<sup>139)</sup>、朝鮮政策に携わらせることさえ、困難になってきた。かれは体よく違う任務にまわされてしまい<sup>140)</sup>、二度と朝鮮の土を踏むことはなかったのである。

馬建忠に代わって朝鮮に駐在したのは、周知のとおり、馬建常とメレンドルフ（Paul Georg von Möllendorff）である。李鴻章がかれらを派遣したのは、

要するに、貴国王が時局を慨嘆し、雄々しく発憤して、改革をお考えであるのは、まことにわが東方の幸いです。ただ心配なのは、貴国は建国から五百年になろうとしており、臣民も旧套に安住していることです。もしにわかに変革を議論したら、驚きのあまり反撥も出てきましようから、情況にさからわずうまく導いて、民をして知らず知らずのうちに変化にむかわせるべきです。そうはいっても、治法あるのみで治人なしでは、法も立てただけになってしまいます。貴国には時局を識る俊傑はもとより少なからずおられますが、古来大いに爲す有らんとした君主は、ほとんど他国の人を登用し、かれと功名をともししています。……国君が制度をかえよう（變法）と思っても、もしその本国の人を重用したら、本国の人たちはまちがいなく自分と同列視して、その人に心服しなくなり、命令が出ても実施は困難となります。ここからみますと、貴国が富強を求めないのならともかく、富強をお求めならば、西



洋人を適宜登用し、関税を徴収させて、殖財の方法を講じてゆくのがよいでしょう。もっとも西洋人で才能ある者は、おおむね尊大傲慢なので、貴国が思いのまま使うことのできる連中ではありません。わたしの考えでは、貴国王からひとり精明正直なる華人を招き、随時、諸事の相談にあずかるようにし、それとあわせて数人の西洋人をも招き、関税徴収を管理させるが、その大綱は中国人のほうが統べることにすべきです。そうしたのちこまかに検討修正を加えて、時間の経過とともにあらためてゆけばよいでしょう。それが貴国のもっとも重要な急務です。以上はすべてわたしの私見で、まだ傅相〔李鴻章〕に申し上げていないものです。もし貴国王が一理あると思し召しなら、帰国してすぐ傅相に申し上げ、貴国のため一人選んで推薦いたしましょう。この人物は貴国王が招くもので、清朝が派遣するわけではないとしなければ、貴国の内政・外交がいずれも自主の権によるというのにさしつかえができません。わたしが早々に帰国しようと思っておりますのは、傅相に内密に上申して、貴国のためにその人物を物色しようとするからにほかなりません。<sup>141)</sup>

という5月14日の馬建忠の回答、ならびにそれをうけた「善後六條」末尾の「その任務を担当する人物を招請雇用しなければならない」という申し出を実現させたもので、二人の人選も馬建忠の推薦による<sup>142)</sup>。とくに馬建忠のほうは、馬建忠がもっとも親近の実兄を、自分の身代わりに立てたものであろう<sup>143)</sup>。そう考えれば、その馬建忠がほどなく帰国した事実は、馬建忠が朝鮮に関わる直接の足がかりを失ったことを意味する<sup>144)</sup>から、以後の清朝・朝鮮関係がかれの素志どおりに推移しなかったとする論評<sup>145)</sup>も、あながち推測、誇張、弁護とばかりはいえまい。

しかしたとえそうだったとしても、朝鮮に対する馬建忠の影響が、それでいっさい消えうせてしまったわけではない。かれは別の任務に移る前に、「善後六條」をめぐる協議のなかで、残務整理よろしく、当面の朝鮮関係の懸案にひととおり目鼻をつけておいた。そこには、朝鮮海関設立<sup>146)</sup>のような「善後六條」に含まれるもののほか、中朝水陸商民貿易章程の締結<sup>147)</sup>、輪船招商局・開平鉱務局の借款供与<sup>148)</sup>がある。いずれも緊密な内的連関を有しつつ、清朝が以後、摩擦をなるべく起こさずに、朝鮮に内政干渉を施してゆく制度上の裏づけとなった。そうである以上、そこに一貫する理念は、馬建忠の「属国自主」以外にありえなかったし、これ以降もそうした事情に、大きな変化はみられない。江華条約が厳然と存在して日本の基本姿勢がかわらないばかりか、朝鮮政府も必ずしも清朝の意のままにならないとみる以上、清朝はその「属国自主」を終始、保持してゆくほかはなかった<sup>149)</sup>。甲申事変後の袁世凱も、本来なら馬建忠がつくはずだった位置を占めては、かれじしんの主観的意図がどうであれ、いわば馬建忠の敷設したレールの上を、ひたすら走りつづけたとってよいのである。

けれどもその行き着く先は日清戦争であった。本国にとどまった馬建忠は、その後「よろず屋」しながら、李鴻章の関係官庁を転々としたあげく、1895年、李鴻章に随行して下関にやってきて<sup>150)</sup>、難渋な交渉をうけもつにいたる。かつてかれを批判してやまなかった袁世凱の、十年に及ぶ朝鮮経営を、かれが清算せざるをえなくなったのは、皮肉なめぐりあわせではある。だが日清戦争は、日本が馬建忠から背負わされた矛盾を解消すべく、打って出た最後の、かつ最大的手段

だった。その出発点はやはりかれにあったともいえる。だとすれば下関条約の締結も、やはりかれが自身に対して果たすべき責務だったともいえようか。

## 註

- 1) 清朝側の事情を比較的くわしく論じたものに、田保橋潔『近代日鮮関係の研究』上巻、朝鮮総督府中枢院、1940年、とくに830～858頁、彭澤周『明治初期日韓清関係の研究』塙書房、1969年、186～274頁があり、もちろん馬建忠にも言及する。しかしそれは、馬建忠の著述「東行三録」（『適可齋記行』巻6、所収。以下「三録」と略す）が、壬午変乱を詳述する史料だからにすぎず、かれの活動そのものに関心をむけ、重大な意義を見いだしてのことではない。それと符節を合わせて「三録」も、「系統的に読みこな」されず、「副次的、断片的」な利用にとどまり（拙稿「馬建忠の朝鮮紀行——一八八二年、清朝・朝鮮・日本関係の転換——」『史林』第82巻第6号、1999年、95頁）、かれ個人はもとより、ひろく清朝側についても、考察はゆきとどかない結果となっている。その具体的な論点は適宜、以下の行論でふれてゆく。
- 「三録」は前掲拙稿、96頁註③で述べたように、壬午変乱にさいした朝鮮奉使の復命書を資料として、編纂されたものとおぼしく、そのうち「日記」以外の「筆談」「密稟」の写しは、『清季中日韓関係史料』中央研究院近代史研究所編、1972年（以下『中日韓』と略す）がその大部分を収録する。それらの引用は、前掲拙稿の先例にしたがう。
- 2) 前掲拙稿。引用は95頁。
- 3) 『中日韓』第2巻、張樹聲あて黎庶昌電報、光緒8年6月17日、18日、734～735頁。吉田清成の通知は、原文はみあたらないが、漢訳が『中日韓』第3巻、809頁に引用。
- 4) こうした考え方をよく説明しているものとして、『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月21日受理、748頁を参照。
- 5) 同上。
- 6) 『中日韓』第2巻、張樹聲あて黎庶昌電報、光緒8年6月18日、735頁。
- 7) 『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月19日受理、734頁。この人選については、張樹聲は馬建忠を第一の候補としてはいたが、後述のように天津を留守にしていた馬建忠を、わざわざ派遣するのが不都合なら、その代わりとして、まもなく帰京復命する前駐日公使何如璋の派遣も考慮していた（同上）。しかし問い合わせをうけた総理衙門が、それでも馬建忠を指名した（『中日韓』第2巻、張樹聲あて総理衙門覆函、光緒8年6月20日、736頁。この覆函は全文を見ることはできないが、その内容は『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲の函、光緒8年6月22日受理、751頁、王信忠『中日甲午戦争之外交背景』清華大學、1939年、39頁を参照）ところに、かれの存在感が窺えよう。
- 8) 前掲拙稿。
- 9) この李鴻章との面会については、後註121)を参照。
- 10) 「三録」頁1、『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月22日受理、751頁。
- 11) これについては、『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月25日受理、768頁を参照。
- 12) 『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月22日受理、751頁。
- 13) 魚允中『從政年表』『從政年表・陰晴史』國史編纂委員會編、1971年、所収、高宗19年壬午6月22日の条、136頁。
- 14) 「三録」頁1。
- 15) 『中日韓』第2巻、張樹聲あて黎庶昌電報、光緒8年6月20日、21日、749、751～752頁。

- 16) 張樹聲あて総理衙門覆函，光緒8年6月23日，王信忠前掲書，40頁所引。『清光緒朝中日交渉史料』巻3，「總理各國事務衙門奏朝鮮亂黨圍攻日本使館並劫王宮派兵援護摺」光緒8年6月24日，頁30～31，同日付上諭，頁31～32。
- 17) 『中日韓』第2巻，総理衙門あて張樹聲函，光緒8年6月25日受理，768頁。
- 18) 同上。
- 19) 『中日韓』第2巻，総理衙門あて張樹聲函，光緒8年6月29日受理，780頁。この会談を張謇の立場から重視するものに，藤岡喜久男「朝鮮時代の袁世凱」『東洋学報』第52巻第4号，1970年，5～7頁，同『張謇と辛亥革命』北海道大学出版会，1985年，9～13頁。
- 20) 『清光緒朝中日交渉史料』巻3，「直隸總督張樹聲奏朝鮮亂黨滋事遵旨派兵保護摺」光緒8年6月30日，頁34～35。6月28日という日付は『中日韓』第2巻，総理衙門あて張樹聲の函，光緒8年6月29日受理，780頁をみよ。裁可は『清光緒朝中日交渉史料』巻3，「軍機處寄直隸總督張樹聲上諭」光緒8年6月30日，頁35。
- 21) 「三録」頁3～5。
- 22) 『中日韓』第3巻，807～808頁。金允植『陰晴史』，前掲『從政年表・陰晴史』所収，高宗19年6月30日の条，186，187頁。
- 23) 前註16)を参照。
- 24) たとえば，前掲『陰晴史』高宗19年6月22日の条，183頁。
- 25) これをたとえば，高橋秀直『日清戦争への道』東京創元社，1995年，39頁，崔碩莞『日清戦争への道程』吉川弘文館，1997年，7頁は，乱党の「鎮圧」というが，これはおそらく，次節に述べる，(2)を通知された当時の日本側の解釈に誤られて，『中日韓』第2巻，751，752頁の「鎮壓」という語を誤訳したものであろう。
- 26) 『清光緒朝中日交渉史料』巻3，「直隸總督張樹聲奏朝鮮亂黨滋事遵旨派兵保護摺」光緒8年6月30日，頁34～35。
- 27) 『日韓外交史料(2) 壬午事変』市川正明編，原書房，1979年，「清国公使ヨリ吉田外務大輔宛」明治15年8月5日，146頁。
- 28) 『岩倉具視関係文書』国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム，18-18-6，三条実美・岩倉具視あて黒田清隆書簡，明治15年8月6日。『伊藤博文関係文書』8，伊藤博文関係文書研究会編，塙書房，1980年，伊藤博文あて山田顕義書簡，明治〔15〕年8月10日，159～160頁，『伊藤博文関係文書』7，伊藤博文関係文書研究会編，1979年，伊藤博文あて松方正義書簡，明治15年8月10日，107頁。
- 29) 前掲『日韓外交史料(2)』「吉田外務大輔ヨリ清国公使宛」明治15年8月6日，147頁。
- 30) 『日韓外交史料(7) 日韓交渉事件録』市川正明編，原書房，1980年，90～91頁。
- 31) 注意すべきは，前註所引の提案で，清朝が朝鮮を「属国」とするのを，第一の「場合」に限定していることである。第二，第三は，「仲裁」にしても「公告」にしても，清朝の出方を第三国のそれと仮想した「場合」であり，日本側は厳密に国際法を基準に考え，清朝が「属国」と明言するばあいと，そうでないばあいとははっきり弁別している。そうした点，高橋前掲書，36頁の「また山県のあげた三の場合への対応は，朝鮮への清の影響力の行使（属国論の実行）の黙認にもつながるものであり，日本の立場である独立論とはそぐわない」という解釈は，少なくとも日本側のみかたに関するかぎり，正鵠を射ていない。山県有朋のいわゆる「従来ノ関係」とは，あくまで清朝・朝鮮間にかぎったものであって，日本をも拘束する公式の，国際法上の関係だとは読めず，「朝鮮への清の影響力の行使」を一概に日本側が「属国論の実行」とみなしたとも，「独立論とはそぐわない」とも解釈できないからである。また崔前掲書，7頁は(1)の「調停」の通告とともに，「朝鮮は清の属国だとの明言」があったとするが，それも誤りである。

いずれも，客観的にみた清朝の「属国」概念と，それに対する日本の主観的な認識とを，少なからず混同したところから導かれた所説である。この間の外交交渉を，当時の文脈に即して復原するには，

清朝の「属国論」と日本の「属国」認識との内容を識別して、両者のあいだの距離を正確に測定することが、まず求められる。

- 32) もちろん「清国ハ専ラ朝鮮ヲ庇蔭シ我カ要求ヲ拒ム等ノ事アラハ是レ即朝鮮ノ党與ニシテ我国ト敵対ノ地ニ立ツ者ト認ムルノ外ナカル可シ」と、そうした点を想定はしている（前掲『日韓外交史料（7）』91頁）けれども、「萬一」というように、きわめて可能性の低いものとしかうけとめていなかった。

33) 『中日韓』第2巻，総理衙門あて張樹聲函，光緒8年6月19日受理，734頁。

34) 『中日韓』第2巻，田邊太一あて総理衙門照會，光緒8年6月24日，764頁。

35) 前掲『日韓外交史料（2）』『清国公使ヨリ吉田外務大輔宛』明治15年8月9日，151～152頁

36) たとえば『花房義質関係文書』国立国会図書館憲政資料室所蔵マイクロフィルム，162-1，井上馨あて竹添進一郎の書簡，明治15年8月4日。

- 37) 前註30) 所引の山県有朋の提案は，いうまでもなく井上毅の起草にかかる（『井上毅伝 史料篇第一』井上毅伝記編纂委員会，1966年，「京城事変対処案」明治15年8月6日，309～310頁）。そこで省略された文言には，

要之我カ今度之主タル目的ハ専ラ朝鮮ニ向て処分を求メ我カ満足之償を得るに在れハ清国と朝鮮非清国之属国論ニ涉リ目的外之葛藤を生ずルハ甚タ好まざる事なるべし況ヤ朝鮮非清国之属国否之問題ニ涉ル時ハ或ハ外之関係国々之中万一清国ニ左袒するものある時ハ意外之面倒を引起スベシ我カ今度之暴挙ヲ責ムル之義挙ハ日星ヨリも明白なるに若シ朝鮮非清国之属国論ニ涉ル時ハ議枝葉ニ涉リ遂ニ水掛論ニ落つるも難斗歟故ニ可成ハ此枝葉之葛藤を避ること緊要なるべし

とあって，その根底には「清国と朝鮮非清国之属国論ニ涉」るべきでないとのみかたがあった。

- 38) 前掲『日韓外交史料（2）』『ボアソナード答議』明治15年8月9日，153，155～156頁。

39) こうした東京での動きとは別に，壬午変乱に対処すべく下関に赴いていた外務卿井上馨は，留守の外務省をあずかる吉田清成から電報で，6月26日の黎庶昌の通告を同じ日に知ると，時をおかず「直チニ総理衙門トノ間ニ朝鮮属邦論ノ談判ヲ開クハ必要ナリ」と判断して，吉田清成に「支那公使へ達スル今般ノ回答ハ，実ニ重大ノモノナリ」，「此回答ヲシテ，将来支那政府トノ間ニ開クベキ朝鮮属邦論ノ談判ノ第一着タラシメンガ為，回答前充分ニ其討議ヲナサザルベカラズ」と打電した（『明治十五年朝鮮事件』宮内庁書陵部所蔵，「外務大輔吉田清成外務卿井上馨宛電文」8月9日，「外務卿井上馨外務大輔吉田清成宛訓電」同日）。はしなくも露呈した日清間の立場上の対立を解決するには，北京政府と直接，朝鮮が属国かどうか交渉することが「必要」で，黎庶昌への回答をその端緒としようという考え方である。

けれどもこれは，それまでの日本政府の方針と，必ずしも一致するものではなかったため，まもなく沙汰やみになる。この電報をうけとった吉田清成に対し，井上毅は，

右征服之事蹟ある上者，朝鮮之事ハ琉球と懸隔之相違有之候，公法ニ依リ局外より平心ニ論シ候ヘハ，朝鮮ハ公法上之所謂半独立之邦ニ而，即チ，バルバリー之都兎其ニおけると同様ニ而，貢属国ニして外国交際にのみ，自主之権を有するものとなす事至當と存候，故ニ我カ今度之葛藤ニ付てハ，専ラ一直線ニ我カ国之朝鮮における直截之関係ニ支那之干渉を容レざる事をのミ主張し，即チ朝鮮之半独立たるの理ニ依リ，其交際上ニハ自主之権ありて朝鮮自ら其責ニ任すべく，我国ハ単純ニ条約第一条ニ拠リ，朝鮮と直接ニ談判すべきの論理を主張する事，最モ精確之議と被存候，是ニ反シ彼レ之属邦といへるに對し，我レより非属邦論を唱へ，彼ノ前年之琉球論と同一之論理を持せんとするハ，議論横道ニ入り，我カ朝鮮ニ對せる処分之目的ニあらざるのミならず，且ツ恐らくハ水掛論ニ落ち，公法上之判断ニ於ても落著いたし兼候半歟……，矢張レドコ迄も，挹約照辨之主義を主張いたし度存候，是レ我ニ於て十分強き論理也。（『井上毅伝 史料篇第四』井上毅伝記編纂委員会，1971年，吉田清成あて井上毅書簡，8月12日付，658～659頁）

と述べて，井上馨の方針を却けている。井上馨もおそらくこうした見解をうけてであろう，遅くとも8月13日には態度をかえ，北京の田邊太一に対し，朝鮮を属国だとする清朝側の主張には，当面いっ

さいとりあわないよう指示し、清朝側が「属国論」を「中止」しないにしても、それは自分が、朝鮮現地の交渉とは「関係ヲ別ニシテ」、東京にて「徐々」に行うべきものとした（前掲『日韓外交史料（7）』97～98頁）。

40) 前掲『日韓外交史料（2）』『吉田外務大輔ヨリ清国公使宛』明治15年8月11日、164～165頁、『中日韓』第3巻、837頁。

41) 前掲『日韓外交史料（2）』『清国公使ヨリ吉田外務大輔宛』明治15年8月12日、165～166頁、『中日韓』第3巻、837頁。

42) 前掲『日韓外交史料（2）』『吉田外務大輔ヨリ清国公使宛』明治15年8月12日、166～167頁、『中日韓』第3巻、838頁。

43) 『中日韓』第3巻、総理衙門あて黎庶昌函、光緒8年7月18日受理、836頁。前掲『明治十五年朝鮮事件』『外務大輔吉田清成外務卿井上馨宛電文』8月13日。

44) 前掲『伊藤博文関係文書』8、伊藤博文あて山田顕義書簡、明治〔15〕年8月10日、160頁。

この史料に関し、高橋前掲書、39、40頁は「清側が、属国論をあくまで主張するのみではなく、日本に対しそれを現実に行使しようとする場合（八月七日閣議での一の場合）、日清間の直接対決は避けられなくなる。そしてその場合は「不得止行懸りに有之、全国決心之外有之間敷」、と日本政府は対清開戦に決意していた。そしてこのとき日本側は清がそうした対応に出る可能性は高いと見ていた。……このときの日本政府の恐慌状態は、杞憂にもとづいていた」と述べる。まず、いわゆる「属国論」の「現実」の「行使」を「八月七日閣議での一の場合」、すなわち「清国ハ朝鮮ハ其属国ナルコトヲ主張シ今度ノ談判ハ清国ニテ引受クヘシト言明ス」と解釈するのは、清朝側の対応の(1)(2)それぞれに対する日本側の反応を混同したもので、従えない。さらに、山田顕義のいう「属国たるの実」は、「朝鮮内政に関与し暴徒を討滅し清政府主位に立」つ行為を通じて、はじめて示されるもので、日本側がもっとも恐れたのも、そうした行為だった。後述のように「先走った」考え方ではある反面、客観的にみて誤った見通しともいえず、これを「杞憂」と片づけるのは、当時の清朝側の対応と日本側の認識に即した理解といえないだろう。

45) 前掲『伊藤博文関係文書』7、伊藤博文あて松方正義書簡、明治15年8月10日、107頁。

46) 前掲『明治十五年朝鮮事件』『外務卿井上馨外務大輔吉田清成宛訓電』8月10日。前掲『伊藤博文関係文書』7、伊藤博文あて松方正義書簡、明治15年8月10日、107頁。

47) 『伊藤博文関係文書』1、伊藤博文関係文書研究会編、塙書房、1973年、伊藤博文あて井上馨書簡、明治〔15〕年〔11〕月日、177～178頁。

48) 前掲『日韓外交史料（2）』『ボアソナード答議』明治15年8月9日、153～154頁。

49) 前掲『花房義質関係文書』14-4、花房義質あて井上馨私信、明治15年8月13日。

50) これは次註の訓令と同時に、朝鮮赴任を命ぜられた井上毅が、下関での花房への訓令と8月20日時点の方針とがちがっていることに言及する（前掲『井上毅伝 史料篇第五』『壬午京城事変差遣命令大意』630頁）ところからもわかる。

51) 前掲『日韓外交史料（2）』『井上外務卿ヨリ朝鮮国駐劄花房辦理公使宛』明治15年8月20日、196～197頁。

52) この訓令の位置づけについて、高橋前掲書、41、42頁は、「対清問題について見れば、〔8月20日の〕訓令は清の出方として、a. 属国論を根拠に事件処理に介入し、平和解決のための「好意ノ媒介者」たろうとする場合、b. 保韓の名義で対日開戦方針をとる場合、この二つをあげていた。aの場合につき花房に与えられた指示は、清が居中調停を申し出るなら拒否、しかし直接の調停はなさず、朝鮮政府に事件の解決をうながす場合は、そのまま放任せよ、であった。一方、bについての対応は述べられていなかった。また宗属問題についてはいっさい清側派遣官員と交渉しないよう指示されていた。aの后者の場合への指示は、(1) 属国論を名分上は認めないが、清がその実を行使することは黙認しようとするものであり、八月七日閣議での三の場合の対応に重なる。(2) これとbの場合への指示がなされていないことを考え合わせるならば、このとき日本政府は、清はbではなくaの平和解決の方

針に出ると予想し、その上で清と暗に協力しながら、事件の処理を行うべきであり、また行いうると考えていたと見ることができよう。③で見た、清の出方についての強い危機感はこのとき消えているのである。要するに、八月二〇日訓令は、大院君を直接の相手として強硬な交渉を行うが、清に対しては葛藤が生まれるのを避けようとするもの、すなわち「朝人ニ向てハ急激を主とし、清人ニハ和平を主とする」ものだったのである。大院君との交渉を拒み、対清開戦を予想していた八月一〇日の方針閣議よりこの訓令までに、日本政府の考えは大きく変化した。この変化をもたらした中心人物は井上外務卿であったと思われる……清の出方についても、朝鮮に謝罪を勧め日本を「内助スル」策に出るだろうと述べ、<sup>(3)</sup> 八日以前の見通しにもどっている。このときすでに井上は、恐慌状態を抜け出しているのである」と述べる。筆者が付した下線の部分(1)(3)は、前註 31) 44) の指摘がそのままあてはまるもので、従えない。

下線部(2)の想定は、高橋氏じしんの論理に従うなら、「日本の立場である独立論にそぐわない」(高橋前掲書、36頁)考え方にほかならない。にもかかわらずこのとき、なぜ日本政府がそう「考えていた」のか、十分な説明を欠く。氏があえて、このような想定をしているのは、花房義質と馬建忠との妥協ばかりか、壬午変乱以後の井上馨の「対清協調」「宗属関係承認」(同上、56～60頁)にも、円滑に接続すると考えたからであろう。しかし、井上馨の外務卿としての方針を「対清協調」「宗属関係承認」といえるかどうか、まだ検討の余地はある(後註 126)参照)し、ひとまず井上馨個人の考え方にきざって、そのみかたに従ったとしても、それにもとづいて、壬午変乱以前の対応を解釈するのは、結果から原因を推し量る立論だといわざるをえない。

また崔前掲書、13～14頁は「当時の国際世論は、朝鮮が清国の属国である以上、事変に対する清国の措置は列国公法上妥当なことであり、日本が軍隊を渡朝させたことは清国に向けて戦争を挑むと同じである、日本の朝鮮「独立論」は成り立たない、というもので」、井上馨はそのため「自分の立場を後退させ」「対清開戦策を一応留保するにいたった」と述べる。井上馨が「対清開戦策」だったかどうか、そもそも疑問だが、よしんばそうであったと仮定しても、それが「国際世論によって一応挫折し」という因果関係はもとより、8月15日付『ヂャッパン・ガゼット』紙の所説(『井上馨関係文書』国立国会図書館憲政資料室蔵、書類672-3)を「国際世論」とみてよいのか、それが井上馨に与えた影響力がいかほどか、もなお実証されていない。

53) 前掲『日韓外交史料(7)』97頁。

54) 前掲『日韓外交史料(2)』「ボアソナード答議」明治15年8月9日、152頁。

55) 以上の経過は、「三録」頁1～2、二度の魚允中との会談は、『中日韓』第3巻、797～798、799頁。いうまでもなく、この時点で信ぜられていた閔妃の死亡は誤報である。

56) まずかれを来訪したのは、仁川府將校成箕連と花島別將金宏臣で、それまでに判明した事実を確かめると同時に、新任の仁川府使任榮鎬が大院君の党派であること、などをかれらから聞きだした(『中日韓』第3巻、800～801頁)。

57) 『中日韓』第3巻、802頁。

58) 明証はないが、その蓋然性が高い。6月24日、呉長慶に張樹聲の動員令を伝えたのは、23日に大沽を出港した丁汝昌であった(藤岡前掲「朝鮮時代の袁世凱」4～6頁、同『張謇と辛亥革命』8～9頁。『張謇全集』張謇研究中心・南通市圖書館編、江蘇古籍出版社、全7冊、第6巻、198、843頁)。その丁汝昌は、張樹聲より「一切の機宜」を「指示」されていたし、馬建忠に対する書面の訓令ももたされていた(『中日韓』第2巻、總理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月25日受理、768頁。「三録」頁1)から、現地の状況をみて、いざというときには、陸軍派遣を要請するよう、すでに指示があったのだろう。馬建忠の要請に「陸軍六營」など、具体的な動員の手はずにまで言及している(「三録」頁4～5)ところからも、それがわかる。

59) 「三録」頁2～3、『中日韓』第3巻、802～804頁。

60) 「三録」頁3～4、『中日韓』第3巻、790頁。

61) 「三録」頁5、『中日韓』第3巻、791頁。

- 62) 『中日韓』第3巻, 801~802頁。
- 63) 「三録」頁6。
- 64) 同上。
- 65) 前註56) をみよ。
- 66) 『中日韓』第3巻, 804頁。
- 67) 「三録」頁6, 『中日韓』第3巻, 792頁。
- 68) 『中日韓』第3巻, 798~800頁。
- 69) 馬建忠『適可齋記行』巻5, 「東行續録」をみよ。
- 70) 田保橋前掲書, 841頁。
- 71) 『中日韓』第3巻, 846~847頁。
- 72) 前掲『日韓外交史料(2)』『朝鮮国駐劄花房辨理公使ヨリ井上外務卿宛』明治15年8月17日, 189頁。
- 73) 同註49)。この井上馨の私信は、高橋前掲書, 54頁註42)に8月16日(7月初3日)に済物浦着と推定されており、それに従う。花房義質はこの私信をうけとってから、前註所引の報告を書きあげたと判断できる。
- 74) 「三録」頁6。
- 75) 『中日韓』第3巻, 847~848頁。
- 76) 「三録」頁6~7, 『中日韓』第3巻, 848頁。
- 77) 「三録」頁7, 『中日韓』第3巻, 848~849頁。
- 78) 『中日韓』第3巻, 849頁。
- 79) 『中日韓』第3巻, 849~850頁。
- 80) 權錫奉「大院君 囚被囚」, 同『清末 對朝鮮政策史研究』一潮閣, 1986年, 239~242, 260頁。
- 81) 「三録」頁7。
- 82) 前掲『日韓外交史料(2)』『朝鮮国駐劄花房公使ヨリ井上外務卿宛』明治15年8月30日の「附属書七 談判経過概要報告」「朝鮮国駐劄花房辨理公使ヨリ井上外務卿宛」明治15年9月28日, 233~234, 249頁。
- 83) 前掲『日韓外交史料(2)』『談判経過概要報告』234頁。
- 84) 『中日韓』第3巻, 852, 853頁。
- 85) 「三録」頁9。
- 86) 『中日韓』第3巻, 852頁。
- 87) 『中日韓』第3巻, 853頁。
- 88) 同上。
- 89) 「三録」頁10~11, 『中日韓』第3巻, 856~857頁。
- 90) これまで重視されてきたのは、引用しなかった後半部分のほうである。たとえば田保橋前掲書, 841, 843頁に「八月十六日其旧知たる日本国外務大書記官竹添進一郎が突如來訪した。馬道は此に日本国外交官と、日今の案件について非公式に意見を交換する機会を得た。竹添・馬建忠会談は、極めて重要な意義を有する。……竹添外務大書記官の説明により、馬道は今次日本国の要求は、當初予期せられたやうな重大なものではなく、國際法上より見ても、比較的公正なのを認めたが、但軍費賠償は竹添書記官の『我政府鎮壓之、借償金之名、以慰國人之心、非有他意也』との言より推して、相当多額に上ることを料り、同書記官の帰朝に託して、駐日清国公使黎庶昌に書を送り、井上外務卿に直接減額を交渉せられんことを要望した」とあり、彭前掲書, 241~242, 245頁にも「八月一六日馬建忠が花房公使の命を受けた大書記官竹添進一郎の對韓要求説明を聴取したことである。……以上の竹添・馬の会談は、いうまでもなく、壬午事件をめぐる日清両国の交渉において、きわめて重大な意義をもつものである。……馬建忠は日本側の對韓要求を一応諒解するとともに、花房公使の對韓交渉に干渉の意を示さなかったのみならず、直接かあるいは間接に花房公使に協力し、事變の善後処理間

題を早急に終わらせようとしたとみられる」とある。

このように後半部分は、済物浦条約締結で決着する壬午変乱の帰趨に、きわめて関連が深いとみなされてきた。けれどもそうした判断は、済物浦条約の内容や締結事情を知る、われわれのいわば後智慧であって、この時点におけるこの会談の意義は、あくまでそれまでの経過にもとづいて、わりださねばならない。

もっとも馬建忠じしんが、日本の要求を当時すこぶる憂慮した、と報告している事実もある（後註127）の引用文をみよ）が、それは後述のように、事後の弁明という色彩が濃厚なものだから、それをもって、当時かれの関心がどこにあったかを判断することはできない。

- 91) そのあたりの機微は、たとえば、Great Britain, Foreign Office, General Correspondence, Japan, (1856-1905), FO46/287, Inouyé to Parkes, Aug. 28, 1882, Encl. No. 1 in Parkes to Granville, No. 122, Aug. 30, 1882.にみえる、駐日イギリス公使パークス（Sir Harry Smith Parkes）に対する井上馨の通知のしかたからも確認できよう。
- 92) 大院君と交渉してもよい、という趣旨の前註49）所引の井上馨私信は、前註73）にみたとおり、会談当日の8月16日（7月初3日）、済物浦に届いていた。竹添進一郎はこれを見たとうで発言したのもだろう。そして同じ日に入京した花房義質のもとには、この私信はまだもたらされていなかったはずである。そう考えれば、竹添進一郎が会談で、「花房の考えはわかりませんが、私見を述べさせていただきます」といっているのも腑に落ちる。
- 93) 「三録」頁9～10、『中日韓』第3巻、854～855頁。
- 94) 前掲『井上毅伝 史料篇第五』井上毅あて竹添進一郎電信、1882年8月21日、155頁。『日本外交文書』第15巻、「井上外務卿ヨリ朝鮮国駐劄花房辨理公使宛」明治15年8月27日、240頁。またFO46/287, Inouye to Parkes, Aug. 28, 1882, Encl. No. 1 in Parkes to Granville, No. 122, Aug. 30, 1882も参照。
- 95) 前掲『日韓外交史料（2）』『朝鮮国駐劄辨理公使花房義質ヨリ竹添外務大書記官宛』明治15年8月17日、187～188頁。
- 96) 前掲『日韓外交史料（2）』『談判経過概要報告』『朝鮮国駐劄花房辨理公使ヨリ井上外務卿宛』明治15年9月28日、235～239, 249～250頁。田保橋前掲書、808～809頁。
- 97) 「三録」頁14。
- 98) 「三録」頁15。
- 99) 「三録」頁16。
- 100) 「三録」頁16、『中日韓』第3巻、868頁。
- 101) そのあたりの機微は、たとえば『中日韓』第3巻、932頁を参照。
- 102) 「三録」頁17～18、『中日韓』第3巻、859～862頁。
- 103) 『中日韓』第3巻、862頁。
- 104) 前掲『日韓外交史料（2）』『朝鮮国駐劄花房辨理公使ヨリ井上外務卿宛』明治15年9月28日、250～251頁。
- 105) 前掲『日韓外交史料（2）』『談判経過概要報告』239頁。

高橋前掲書、54頁註45）にいう、双方の記録の対応関係は、一概にそうとは断定できない。ただし高橋氏が論及する「自主」の語義は、たしかに馬建忠の対応としても、注目に値する。かれはここまでの交渉で、「自主」という術語を、朝鮮国王の実権回復の意味で使っており、引用した筆談の前半でも、それに準じているが、にわかに後半で、その意味とあわせて「属国自主」の自主の趣旨をもきわだたせている。これに対する花房義質の回答は、実際にそう発言したとするなら、属国に相反する自主の謂なのは明白であろう。しかし朝鮮国王の「自主」と重ね合わせた馬建忠の巧みなレトリックによって、日本側も「属国自主」に賛同した、と清朝側には読める文章になっている。馬建忠と花房義質が現実会談で、どのようなやりとりをしたか、知る由もないけれども、少なくとも「自主」において双方の意見が一致した、と馬建忠が清朝本国に伝えた事実は、看過できない。



106) この間の経過を、パークスは井上馨から伝え聞いたものとして、以下のように記す。

馬建忠は日本と朝鮮のあいだをなんとか調停したいといって、花房に二つの方法を提案した。その第一は、馬と花房が共同で大院君を排除し、朝鮮に新政府をたてる、第二は馬が日本と朝鮮を仲裁する。花房は二つともことわった。かれは馬に、自分は訓令で朝鮮の内政に干渉してはならぬと命ぜられており、それゆえその政体に容喙することはできないし、その不幸なる内紛にも関わり合うことはできない、と述べた。かれは朝鮮の事実上の政府から、……十分な賠償を得なければならぬし、それ以外は目的ではない。しかもすでに大院君と友好的な交渉をもったからには、いまさらかれを敵として攻撃するわけにはいかない。かれはまた、馬の仲裁をも受け入れることはできなかった。日本はどこの仲介も通さずに朝鮮と問題を解決できる権利を保持しているのみならず、花房も、この仲裁は中国政府・日本政府双方に問い合わせを要して、時間がかかるのは明らかなので好ましくなく、これを受け入れる権限を与えられていないとの理由からである。もちろん馬が、みずからすすんで和平のため友好的な周旋を行うのは、自由である。もっともそのばあい、あくまで内密な (of a private character) 尽力でなくてはならず、日朝間の交渉の表面に出てきてはならない (FO46/288, Parkes to Granville, No. 126, Sep. 11, 1882.)

「仲裁」すなわち前註引用文のいう「居中停調」と、「大院君を排除」すなわち前註引用文のいう「整理シ院君ヲ斥クル」とが会談の問題であり、花房は両者ともに拒絶したというのが、日本政府の見解なのである。

107) 田保橋前掲書、845～846頁には「翌八月二十四日には自ら仁川に急行し、仁川府衙に於て花房公使と会見した。馬道が花房辨理公使と会見を急いだのは、日韓両国間に斡旋して、両国国交断絶を防止するためであつた。けれども日本国外務省は、已に駐日公使黎庶昌の提議を正式に拒絶して居るので、その名を避け其实を収めるのに腐心しつつあつた。……公使は馬道の言に大院君を却け、国王に政権を還す意味があるを看取したが、翌八月二十五日馬道を花島別將營に答拜して、日本国政府としては、既に朝鮮国に提出した要求の貫徹することを先決問題とし、如何なる形式にもせよ、第三国の介入を排斥する。若し朝鮮国にして、今明日中全権大臣を仁川に派出せられるならば、商議再開も敢えて辞するところではないと言明した。公使は大院君が若し廟堂を去れば、朝鮮国の態度がたちまち緩和すべきことを予想し、暗に商議再開を希望する旨、馬道を通じて朝鮮政府に示唆したものと解せられる。馬建忠の周到なる外交は、花房公使をして其調停を排斥しつつ、事実上局面展開のためには、其調停に依頼する外已むなきに至らしめた」とあり、高橋前掲書、47頁も「つまり、馬は花房に、大院君政権打倒の意があることを示し、それまでは決定的行動（日本への帰国）に出ず時期を待つよう勧めたのである。そして翌二五日、花房は馬を答訪、なお二、三日は仁川にとどまるが、その間に朝鮮側に交渉のための使者がこなければ、後はどうなるか判らない……、と交渉決裂までに、二、三日の猶予を与えることを述べ、それまでに馬が事態を打開するように暗に求めた。清の大院君政権打倒により事件を決着させるという筋書きが、両者の間で暗黙のうちに成立したのである」とあって、通説では花房義質が馬建忠に二日の猶予を与えたことで、いわゆる「暗黙」の了解が成ったとみる。しかし以上の叙述に従うなら、そうした「暗黙」の了解の存否は、花房義質の「尚両日此地ニ在テ韓廷ノ答フル所アルヲ待ツ」（前掲『日韓外交史料（2）』『談判経過概要報告』239頁）という言の真意のみならず、当時の馬建忠の企図と情勢判断ともあわせて、再考すべきだろう。

108) 「三録」頁18～19。

109) 7月16日の李鴻章あて報告では、これを7月14日に繋げる（『三録』頁29、『中日韓』第3巻、874頁）が、その日に馬建忠が朝鮮国王に連絡をとった記事は、ほかには見えないから、おそらく全権の任命派遣とまとめて記したものだろう。また、後註127) に引用する7月18日の李鴻章あて報告では、7月13日、大院君拉致直後に申し入れたとあるが、これは後註114) の、魚允中・趙寧夏あての書簡において、大院君拉致の「事状」を知らせると同時に、書面で正式に要請したことを述べたとおぼしく、その前に何らかの打診はあったとみるべきだろう。

110) 朝鮮政府が花房義質に交渉再開を申し入れたのは、7月12日（8月25日）の洪淳穆の書簡による

(『日韓外交史料 (2)』223頁)。田保橋前掲書、845頁は「馬道はとりあへず接見大官趙寧夏に囑して国王を説き、又領議政洪淳穆の名を以て、書契を仁川滞在中の花房公使に送り、商議再開を希望する意向を通じ、其出発を延引せしめるやう注意したと解せられる」といい、これを馬建忠が指示したものと推測している。その可能性を史料上、全面的に否定はできないものの、馬建忠の到着入京に安堵し、その調停に期待する大院君が、入京の翌日ただちに仁川へむかった馬建忠とは別に、朝鮮政府として、交渉に前向きな姿勢を示そうとしたとみるほうが、より自然だろう。この申し入れを、客観的事実として馬建忠の意図、なかならず大院君の拉致とむすびつけるのは、速断に失する。

- 111) 花房義質が前註に言及した洪淳穆の書簡を受理し、「更ニ二日間舟ヲ停メテ其親ヲ來リ議スルヲ待ツノ意ヲ覆答」したのは、7月13日(8月26日)のことである(前掲『日韓外交史料 (2)』「朝鮮国駐劄花房辦理公使ヨリ井上外務卿宛」明治15年9月28日、251頁)。大院君拉致が決行されたのは、同じ13日の夜だから、花房義質が馬建忠の「院君ヲ斥クルノ意」は知っていた(前註105))としても、大院君拉致の事実を知ったうえで、「二日間」の猶予を洪淳穆に「覆答」したとは考えられない。15日(8月28日)、全権の李裕元・金弘集が仁川にくるまでに、それを察知したかどうか、実はよくわからない。花房義質はのちに、

二十六日領議政ノ書到ル文中我ノ再ヒ入京シテ商辦スルヲ望ムノ意アリ依テ更ニ今ヨリ二日間舟ヲ停メテ其親ヲ來リ議スルヲ待ツノ意ヲ覆答ス(此日清將吳長慶等大院君ヲ其陣ニ招キ捕ヘテ歸ラシメス南陽ヨリ船ニ搭シ北京ニ伴ヒ去ルト云確聞ヲ得タリ)(前掲『日韓外交史料 (2)』「朝鮮国駐劄花房辦理公使ヨリ井上外務卿宛」明治15年9月28日、251頁)

と報告しており、卒読すると7月13日(8月26日)に「確聞ヲ得タ」ようにみえる。けれども大院君を「船ニ搭シ」たのは翌14日だ(『中日韓』第3巻、874頁、前掲『井上毅伝 史料篇第五』、井上毅「朝鮮事件辦理日記」369頁)から、事後に知った情報をさかのぼらせ、「二十六日」に繋けて書き込んだものと判断せざるをえず、その事後とは厳密にいつなのか、やはりわからない。

濟物浦条約交渉が始まるまでに、大院君の拉致を察知していなかったとすれば、まったく行論に問題がないので、察知したばあいのみ、仮定して考えてみよう。この時点で花房義質がもっとも恐れるのは、馬建忠が大院君拉致を果たしたうえで、なおかつ日朝交渉にも干渉してくることであり、もしそうになったら、かれも拒絶していたにちがいない。しかし馬建忠が動かなかったことで、交渉そのものは日朝二国間の問題となった。井上毅が来着し、前註51)所引の井上馨の訓令を花房義質にとどけたのは、交渉が始まった15日である。大院君が拉致された日前の情勢を、その「第一」「第二」いずれに該当するとみるか、花房義質・井上毅ともに苦慮したと想像されるが、井上毅の言に、

支那人ハ大院を拘引し、朝鮮内政ニ向ひ、十分之干渉を行ひ、属国之名称ニ違はざる實力を施ス之政略ニ出候といへとも、案外我ガ談判ニ居伸せずして、却而陰ニ平和之結局を誘導したる(前掲『井上毅伝 史料篇第四』、山県有朋・井上馨あて井上毅書簡、明治15年8月30日、611~612頁)

とあるような判断を、最終的に下したと思われる。花房義質再入京後の情勢ということで文脈は異なるが、「更ニ時日ヲ遷延スレハ必ス清人干渉ノ道ヲ啓クヘク」(前掲『日韓外交史料 (2)』「朝鮮国駐劄花房辦理公使ヨリ井上外務卿宛」明治15年9月28日、252頁)と述べるところからも、清朝側の干渉の存在を知りながら、それが日本側の直接の利害にまで及ばないうちに、対処をすませようとするかれの態度がうかがわれよう。

- 112) 「三録」頁23~25。『中日韓』第3巻、845頁。

- 113) 「三録」頁22~23。

- 114) 「三録」頁19。

- 115) 「三録」頁19~20。

- 116) 「三録」頁28。

- 117) 後註127)の引用文末尾をみよ。

- 118) 『中日韓』第3巻、910~912頁。「善後六條」の簡単な紹介は、糟谷憲一「壬午軍乱直後の閔氏政権と「善後六条」」『東アジア — 歴史と文化 —』創刊号、1992年を参照。

119) 前掲「東行續録」頁7～8。この筆談については、すでに茂木敏夫「近代中国のアジア観 — 光緒初期、洋務知識人の見た「南洋」 — 」『中国哲学研究』第2号、1990年、107頁、同「馬建忠の世界像 — 世界市場・「地大物博」・中国－朝鮮宗属関係 — 」『中国哲学研究』第7号、1997年、7～9頁が、馬建忠の思想との関連でふれているが、これは前掲拙稿、96頁註②の指摘がそのままあてはまる。

120) たとえば、第三の「軍制を整ふ」で壬午変乱をおこした旧軍兵士の不満を「不均」と表現するのは、馬建忠の回答にもとづいた可能性がある。

121) そのいきさつは、『中日韓』第2巻、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月11日受理、張樹聲あて総理衙門函、光緒8年6月12日、総理衙門あて張樹聲函、光緒8年6月17日受理、728、729、732頁、前掲『陰晴史』高宗19年壬午6月13日の条、175～176頁を参照。

もちろんこの李鴻章との面会は、5月14日の筆談だけがその目的ではなかった。このとき馬建忠がたずさえた上申書が、馬建忠『適可齋記言』巻4、「上李伯相論朝鮮商約界務稟」である。その内容は、朝鮮から煙台へもどってきた5月18日（7月3日）、張樹聲に提出した複数の復命書（たとえば『中日韓』第2巻、696～697、702～704頁）をとりまとめたものだが、5月14日の筆談はそこに収められていない。

122) 後註127)の引用文に続く文には、

追伸。このたび朝鮮は大乱を経たばかりで、生まれ変わるにひとしい情勢にある。あらゆる善後処置は、憲台〔李鴻章〕の裁決を得るものでなければ、とても手の着けようがない。趙寧夏らも、朝鮮国王が「中堂〔李鴻章〕に面会するまでは、帰ってきてはならぬ」と命じた、といっており、きわめて鄭重な物言いだ。もしわたしが帰国したときに、まだ憲台が北上して天津にお戻りでなかったら、ただちに寧夏らをつれて安徽に行くので、ぜひお会いいただきたい。

とあり、かれがここで、安徽にまでつれて行く、と言っているところが注目される。すなわちたんに北洋大臣衙門ではなく、直接に李鴻章本人と面会して協議せねばならないという手続でも、5月14日の筆談と「善後六條」は、共通するといえよう。

123) 前掲『陰晴史』高宗19年壬午5月初1日の条、150～151頁。

124) 開港と海関の設置については、『中日韓』第2巻、656～657頁。もっともそれ以前から、なかんずくすでに江華条約をむすんでいた日本との貿易にかかわって、海関の設置は清朝側と協議されてきた（『中日韓』第2巻、475、476～477、589、594頁）けれども、設立にむけた本格的な検討は、この筆談を嚆矢とする。また鉱山開発については、馬建忠『適可齋記行』巻4、「東行初録」頁18～19、『中日韓』第2巻、659～660頁。この鉱山開発に関する筆談だけが、「東行初録」に再録されたのは、文獻的にいえば、「東行續録」に収めた5月14日の筆談にいう「以前こまかに申し上げました」と接続させるためであり、さらには、済物浦条約とも重大な関係があつて「三録」とも連絡をつけるためであらう。

125) 前掲拙稿、118～121頁。

126) そうした日本のうけとめかたを端的に表現するものとしては、次のような井上毅の述懐をあげるのが、もっとも適当であらう。

……生之愚考ニ而者、支那人之持論ハ、朝鮮ハ各国と平等之約を為し、内治外交其自主ニ任しなから全く支那之属邦たり、故ニ支那ハ各国之上ニ位置スル之勢なり、猶東洋之羅馬帝の如く、王ニ王タル之資格也とせるもの也、此迷夢を破らざれば、朝鮮属邦論ハ遂ニ消滅之期無かるべし、今度之件ハ、支那ニ於而即ち其素論ヲ実行せるものにして、属邦自主之ニ点並行不悖之意味を顯したるもの也、而して我国ハ朝鮮ニ向て一直線ニ我カ取初之目的を達する為に簡潔之处分をなしたれども、傍ら支那之属邦論を实地ニ黙許したる之形迹あるハ、実ニ遺憾とすへきものなきにあらず、故ニ今日ハ将来永遠の為ニ支那ニ向て、縦令公然と掛合ふに至らずとも、どの道よりぞ一応ハ彼レ之处分を黙許せざる意味を示し置候事簡要歟と奉存候、固より万々彼レより用意を表し候事も有之間布候へとも、更ニ又惡結果を生し候事ハ有之間布との考ニ有之候、乍去右等外交政略ハ、実ニ一時之生考ニ而ハ、意想外之結果之至候も難斗と信疑相半候位ニ而、中々固執いたし積ニハ無之候へとも、

一応愚意奉陳述候、頓首。(『井上毅伝 史料篇第四』, 吉田清成あて井上毅書簡, 明治15年10月31日, 659~660頁)

日本側じしん, こうした心ならずも矛盾する行動をとらざるをえなかった事例の最たるものが, 大院君拉致への対応だった。井上馨は外務卿として, 濟物浦条約締結当初, 朝鮮政府と交渉し, 清朝側と接触している花房義質をはじめ, 国内に対しては, 大院君拉致が当面の事態収拾を円滑, 迅速ならしめたとして, 好意的に評価した(前掲『明治十五年朝鮮事件』「外務卿井上馨辦理公使花房義質宛訓令」明治15年9月3日。高橋前掲書, 50~51頁, 崔前掲書, 38頁)けれども, やはり朝鮮を独立国とする日本の原則的な立場に矛盾する, 「朝鮮の内治に干渉せし」措置にはまちがいなく(前掲『伊藤博文関係文書』1, 伊藤博文あて井上馨書簡, 明治〔15〕年〔11〕月日, 178頁。この井上馨の見解は, おそらく前註111)所引の井上毅の書簡をうけてのものだろう), とりわけ外にむかっては, それを非難しなければならなかった(FO46/288, Parkes to Granville, No. 126, Sep. 11, 1882)。

そうした事情はもちろん, 大院君拉致にとどまらない。これ以後, 清朝=馬建忠の朝鮮政策が実行に移されてゆくにつれ, たちまち対朝関係全般へひろがってゆき(たとえば, 前掲『井上馨関係文書』, 井上馨あて榎本武揚書簡, 1882年10月18日), 容易に解消の見込みがつかない矛盾となる。けっきょく政策のうえでも, 清朝には「朝鮮ノ属国ト不属国ヲ我ヨリ提起セズ」(『日本外交文書 明治年間追補』第1冊, 287頁), 「時機到来迄ハ右清国ノ挙動ヲ知ラサル者ノ如クシ(可成的清国ト撞触スルヲ避ケテ)依然朝鮮ヲ待ツニ独立国ヲ以テスル積ニ候」(『日本外交文書』第16巻, 「井上外務卿ヨリ在獨逸日本公使館青木周蔵宛」明治16年1月19日, 3頁)という対応をつづけざるをえなかった。それがまもなく, 朝鮮の独立党の動向と清仏戦争の激化という情勢変化とあいまって, 甲申事変の前提となるのはいうまでもあるまい。

もっとも理論上つきつめて考えれば, 矛盾解消の方策は, 一方の極に清朝との「平和」を徹底させる「宗属関係承認」, もう一方の極に日清開戦も辞さない朝鮮独立の追求を設定することができる。たとえば高橋氏は, 井上馨が前者をとえ, 後者と対立する「政策選択」を行つたと指摘した(高橋前掲書, 57~59, 71, 155~156頁)うえて, 両者を長期的には, 長州派と薩摩派という人脈で整理し, 日本の朝鮮政策に内在する二つの「潮流」(たとえば同上, 305, 515頁)だと措定して, 氏の描く日清戦争前史全体のモチーフとする。

けれども氏が依拠する, 「最初生於内閣論ゼシ如ク, 清国ヲシテ属国之実使挙」という井上馨の発言(前掲『岩倉具視関係文書』3-8, 岩倉具視あて井上馨書簡, 1882年10月29日)は, 文脈を丁寧にあたれば, 修辭的に仮定を極論したものとしか読めず, かれがそれをそのまま, 実行を念頭に置く「政策」として, 「主張」したとまではいえない。その意味で, 森山茂徳『日韓併合』吉川弘文館, 1992年, 20頁の批判は, 当を得ている。前者にしる後者にしろ, いずれも当時はじめて生じた矛盾を, いっきに解消してしまうと仮定するなら, そう極論しうる, という次元の方策であり, 現実の具体的な「政策」構想として, しかも壬午変乱当初から連続的に, 存在するものだったかどうか, かなり疑わしい。特定の政治家など, 個人の純然たる思想の傾向として, 直接これらを論じることは可能であろう。しかし現実に清朝・朝鮮, また列強との関係がからみあって推移する朝鮮政策で, 仮定上の極論たる両者のうち, どちらが主流かという問題のたてかたは, 少なくとも日本の外交を, 全体的に当時の文脈で考えるにおいては, 生産的ではない。

127) 『中日韓』第3巻, 877~879頁。

128) 「三録」頁27, 『中日韓』第3巻, 870~871頁。

129) 「三録」頁28, 『中日韓』第3巻, 871~872頁。

130) 馬建忠はそうした態度の変化を, あらたに朝鮮にきた井上毅の策動だとする(「三録」頁28)。

高橋前掲書, 30, 52頁註6), 崔前掲書, 35頁は, 7月31日の閣議で五十万円という賠償金の額が決定したとし, 8月2日の訓令で花房義質に伝えられたとみているようである。しかし根拠とする前掲『伊藤博文関係文書』1, 伊藤博文あて井上馨書簡, 明治〔15〕年〔11〕月日, 178頁の記事だけでは, 賠償額の決定・花房義質への通知いずれも, その日付を特定できず, 遅くとも8月20日の訓令が

とどいた時点で、五十万円という金額を花房義質が知っていたことしかわからない。しかも8月2日の訓令の時点で、かれが五十万円という金額を指示されていたとしたなら、竹添進一郎が馬建忠との筆談で、賠償金は「名目だけですので、いくらという問題ではありません。すみやかに交渉がまとまるなら我が方はこれを掲げないかもしれないのです」などと発言する（『中日韓』第3巻、859頁）だろうか。これを竹添進一郎の詐術とする解釈もある（王如繪『近代中日關係與朝鮮問題』人民出版社、1999年、109～110頁）けれども、あまりに一面的な推論ではたがえない。

朝鮮での交渉において、五十万円という具体的な額が問題となったのは、8月29日、金弘集との協議がはじめてであり（前掲『日韓外交史料（7）』124頁、「三録」頁27、『中日韓』第3巻、871頁）、それまで花房義質が朝鮮政府に対し、金額に言及したことはなかった。これをかれの交渉上の駆引だとみることでもできようが、本国から金額にかかわる指示をうけていなかった可能性も否定できない。そして日付から考えると、井上毅が28日、8月20日の訓令を花房義質にとどけたさい、あわせて金額の指示を伝えたとも考えられる（前掲『井上毅伝 史料篇第四』山県有朋・井上馨あて井上毅書簡、明治15年8月30日、612頁に「賠償之金額ニ付而者、少シ過当とも可被思召歟ニ候へとも、是ニハ花房も別ニ存意有之、何レ帰京拜謁之上可奉口陳候」とあって、井上毅が8月20日の訓令とともに、少なくとも五十万円は多すぎるとの井上馨の意向をうけていたことは、推測できる）。そう仮定すれば、井上毅の役割に対する上述の馬建忠の得た情報とも、竹添進一郎の賠償金に関する発言とも辻褄が合う。

131) 事実かれは朝鮮を離れるにあたり、花房義質に書簡を送り、賠償金の軽減を要請している（「三録」頁32、『中日韓』第3巻、890～892頁）。もちろん日本側は、「一旦取極めたるものを今更減少するは、只馬氏の書翰をして隠然効能を顕さしめ、且つ結局の後に至て恩を賣らんとせば清国の恩義と思考せしむるに過ぎず」として、それに動かされなかった（前掲『伊藤博文関係文書』1、伊藤博文あて井上馨書簡、明治〔15〕年〔11〕月日、179頁）。

132) 客観的にみてこれが虚構なのは、いうまでもないが、馬建忠においても、このときはじめて述べたことである。その間の事情は、前註112)所掲の7月13日の張樹聲あて復命書の筆致とつきあわせれば、一目瞭然だろう。

こうした作為がはっきりみてとれるのは、第二段にある「わが政府は朝鮮を保護し、絶対に寸土も失わせない」という一文である。これは前註102)に引用した「朝鮮の土地を奪取するとの議論については、わが政府にそんな意思は決してないと断言できます。わが政府の意は、朝鮮がその国を保有し、寸土も失わないよう望み、……」という馬建忠自身の筆談に対応するものだが、その筆談はもと、清軍派遣の目的を質した花房義質の疑義に対する馬建忠の回答であり、清朝が朝鮮の領土を奪わない、との文脈である。ところがこの報告では、かれ自身のそうした発言を、日本に朝鮮の領土を奪わせない、という意味にすりかえているのである。

133) 『中日韓』第3巻、李鴻章の奏摺、光緒8年7月29日受理、883頁。この上奏文で李鴻章は、馬建忠の報告の趣旨をそのままとりついでいる。

134) 記録で確認できるかぎりでは、馬建忠に対する不信感は、やはりこの賠償金をめぐっておこっているようである（金昌熙『東廟迎接録』高宗19年壬午7月26日の条、呉相湘「三韓扶桑所見袁世凱關係史料」、同主編『中國現代史叢刊』全6冊、正中書局、1962年、第4冊、所収、428～429頁）。こうした不信感がはっきり批判に転化するのは、再度王京に入った日本軍（花房義質が再入京したのは7月25日（9月7日）。前掲『日韓外交史料（2）』「朝鮮国駐劄花房辨理公使ヨリ井上外務卿宛」明治15年9月28日、252頁）を目の当たりにしたときだった。張謇はその「甚だ弱き」を見て、五十万円の賠償金を認めるほど譲歩する必要はなく、「失計」だったと惜しみ（前掲『張謇全集』第6巻、204頁）、その数日後には袁世凱が、「交渉之人」馬建忠は「日本を恃んで自重し」と「罵る」にいたった（前掲『東廟迎接録』高宗19年壬午8月初8日の条、430頁）。

もっともかれらのこうした馬建忠批判は、賠償金が直接の原因だというよりも、李鴻章が呉長慶軍を「馬建忠に属せしめ」る、馬建忠がかれらのつかえる呉長慶に取って代わるとの情報を得たからで

あろう（前掲『張謇全集』第6巻，205頁。また田保橋前掲書，872，873頁，藤岡前掲書，23頁も参照）。

- 135) 張謇については，前掲『東廟迎接録』高宗19年壬午8月初10日の条，430～431頁，袁世凱については，同上，431～432頁。

- 136) 張佩綸『澗于集』奏議卷2，「條陳朝鮮善後事宜六事摺」光緒8年9月16日，「道員馬建忠擅預倭約請查辦片」光緒8年9月16日，頁63～66，67～68。

以上のように考えてくると，朝鮮政策における李鴻章と「清流派」の対立は，あくまで済物浦条約の結果，馬建忠批判のなかから生じたものであって，それをそのまま壬午変乱以前にさかのぼらせて，「自重的」な路線と「積極的」なそれと解釈することはできない。李鴻章が不在で，その代理の張樹聲が「清流派」に属していたがゆえに，壬午変乱にさいする清朝側の対応が敏速かつ有効たりえたというのは，前註134)135)にみた張謇・袁世凱の馬建忠・李鴻章批判の一環をなす説にすぎず，それを壬午変乱勃発当時の客観的史実とみる（藤岡前掲「朝鮮時代の袁世凱」8頁，高橋前掲書，132頁）のは無理がある。

- 137) 『李文忠公全集』奏稿卷45，「議覆張佩綸條陳六事摺」光緒8年10月初5日，頁9～13，「查覆馬建忠參案摺」光緒8年10月12日，頁22～25。

- 138) 『中日韓』第3巻，1041頁，彭前掲書，372頁。

- 139) 袁世凱は8月13日（9月24日）の時点で，馬建忠の再来があっても長く朝鮮にとどまることはなく，かれに代わる馬建常の赴任，駐在を早くも予想している（前掲『東廟迎接録』高宗19年壬午8月13日の条，432頁）。また8月17日（9月28日）には，李鴻章の書簡に接し，あらためて，馬建忠の再来はおそらくあるまい，と予測している（同上，高宗19年壬午8月17日の条，432頁）。

- 140) これはつとに，彭前掲書，372頁が言及している。もちろんもっぱら朝鮮問題だけに貼りつけて，それを取り扱わせておくには，馬建忠が多才で有能にすぎたことはまちがいない。なかんずく当時，ヴェトナムをめぐる関係が陰悪化しつつあったフランスとの交渉で，かれの補佐が求められていた。遅くとも光緒8年10月17日，馬建忠はフランス公使ブーレ（Frédéric-Albert Bourée）との交渉にあたっているのが確認できる（『中法越南交渉檔』中央研究院近代史研究所編，1962年，第1巻，総理衙門あて李鴻章函，光緒8年10月19日受理，531頁）。

しかしそれだけが理由だとは，とうてい考えにくい。李鴻章の配慮としては，名指しで弾劾をうけた馬建忠の身を保全するため，折しもかれの助力が必要だった方面へ，かれをふりむけたとみるのが自然であろう。にもかかわらず朝鮮問題では，やはりぬきんでてかれが精通していたから，こののちも懸案が出るたび，かれがその解決に参与している。

- 141) 同註119)。

- 142) 馬建常・メレンドルフの任命，ならびに馬建忠の朝鮮赴任不可能は，10月初2日（11月12日），趙寧夏らに通告（『中日韓』第3巻，1038～1041頁），10月初5日，正式に上奏された（『李文忠公全集』奏稿卷45，「代朝鮮聘西士片」光緒8年10月初5日，頁14）。趙寧夏とメレンドルフの契約がかわされたのは，10月初8日である（『中日韓』第3巻，1045～1046頁，前掲『陰晴史』高宗19年壬午10月初8日の条，202頁）。

メレンドルフの任命は，直接には趙寧夏の「善後六條」にこたえたかたちとなっているけれども，実際には馬建忠が推薦したもの（Rosalie von Möllendorff, *P. G. von Möllendorff: ein Lebensbild*, Leipzig, 1930, S. 35, 38. 「穆麟徳 ㄹ 手記」穆麟徳夫人編・高柄翊訳，『震檀學報』第24号，1963年，153，155頁，高柄翊「穆麟徳 ㄹ 雇聘 ㄹ 背景」『震檀學報』第25・26・27合併号，1964年，235頁，Yur-Bok, Lee, *West Goes East, Paul Georg von Möllendorff and Great Power Imperialism in Late Yi Korea*, Honolulu, 1988, pp. 45～46.）であって，ここからも第5節に考証したように，「善後六條」の内容に，馬建忠の意向が大きくはたらいっていたことがわかる。それにくわえて，反目的役割をメレンドルフに期待したという李鴻章の発言（高柄翊前掲論文，235頁，彭前掲書，374頁，前掲『陰晴史』高宗19年壬午10月14日の条，206，208頁）も，馬建忠のシェーフェルト条約以来の方針（前掲拙稿），

済物浦条約に対する弁明（前註127）と揆を一にしている。そうした視角からすると、メレンドルフの朝鮮派遣がはじめてもちあがったのは、実はもっと早く1882年7月の時点だった事実（Möllendorff, a. a. O., S. 35. 前掲「穆麟徳 斗手記」153～154頁、高柄翊前掲論文、234頁）が注目に値する。この時期は馬建忠が朝独条約締結を終えて、帰国したときと重なっているから、メレンドルフ派遣の構想は、前註141）にみた5月14日筆談の建言によるものとしか考えられない。かくして、5月14日の筆談と「善後六條」とメレンドルフの派遣は一本の線につながり、それが馬建忠の朝鮮政策の重要な一環をなしていたことがわかる。

周知のとおりこのメレンドルフ派遣は、前註124）にもふれた海関の設立が、その第一の任務とされていた。洋関總稅務司ハート（Sir Robert Hart）はそれにかかわって、朝鮮への「洋関」導入にすこぶる好意的だった（John King Fairbank, et al, eds., *The I. G. in Peking: Letters of Robert Hart, Chinese Maritime Customs 1868-1907*, 2vols., Cambridge, Mass., etc., 1975, Vol. 1, Letter No. 382, Hart to Campbell, Z/94, Oct. 30, 1882, p. 429）反面、メレンドルフという人選には難色をしめした（Möllendorff, a. a. O., S. 38. 前掲「穆麟徳 斗手記」155頁、Fairbank, et al, eds., *op. cit.*, Letter No. 390, Hart to Campbell, Z/100, Dec. 10, 1882, p. 436）。こうした経緯からわかるように、朝鮮海関の設立やその總稅務司としてのメレンドルフの派遣をこのとき企画したのは、あくまで馬建忠である。ハートは実務に関する「問い合わせ」を受けただけで、ほとんど関与していない（*ibid.*, Letter No. 443, Hart to Campbell, Z/145, Nov. 6, 1883, p. 497. 『中日韓』第5巻、総理衙門あてハート呈文、光緒14年6月初4日、2483頁）。

ハートの意向にもかかわらず、メレンドルフを強く推したのが馬建忠だったことは、メレンドルフ本人もよく自覚していた。しかしそれは、かれが馬建忠の方針にまったく従順だったことを意味するわけではない。メレンドルフの11月11日の日記には、

馬は……わたしを信頼できる人物だと極力推薦すると同時に、総督をわたしの味方にしてもいた。しかし中国の一行政部がこういう問題を全面的に処理するというのは、朝鮮が藩属国ではなくて、中国の一省同然の印象を与えるので、中国の政策にはたがうものであるとも思った。朝鮮の内政は中国の影響から完全に独立しなければならない。（Möllendorff, a. a. O., S. 38. 前掲「穆麟徳 斗手記」155頁）

と記してあり、すでに派遣前から、メレンドルフの見解と馬建忠＝清朝側の朝鮮政策構想とが乖離していたのをみてとれる。以後のメレンドルフの専行はここにきざしていたのであって、馬建忠の人選はこの点で、誤っていたともいえる。もっとも馬建忠は何もかも承知のうえで、ほかに適任の人物がいなかったため、あえてかれを選び、かれを掣肘するねらいで馬建忠をつけたのかもしれない。

こうした点で、高橋前掲書、141頁註36に、「メルレンドルフと馬建忠を顧問として派遣したことには、彼らを通して影響力を行使しようとする意図がたしかにあった。しかし、これも清よりの押しつけ派遣ではなく、欧米への開国にあたり朝鮮側が西洋の言語・事情に通じた顧問の派遣を求めていることに応じたもので、お雇い外国人の雇傭という側面を持っていた。またメルレンドルフの現実の行動（馬は一八八三年中に帰国した）は、李の期待に反し、清よりの朝鮮の自立をめざすものとなった……」と述べるのは、正確ではない。馬建忠の方針、手法から見ても、「朝鮮側が……求め」たことと「押しつけ」は矛盾しないし、海関など当時の中国・朝鮮の西洋人雇用を、日本史の範疇でしか通用しない「お雇い外国人」と定義することは、啓蒙的なアナロジー・メタファーならともかく、学術的な分析とはいえない。これについては、後註149）も参照。

143) 朱維錚「近代中國的歴史見證——百歲政治家馬相伯」『馬相伯集』朱維錚主編、復旦大學出版社、1996年、所収、1178頁を参照。馬建忠じしんの述懐では、李鴻章はこのとき、馬建忠を側においておきたかったので、自分が行くよう命ぜられた、という（『一日一談』、前掲『馬相伯集』所収、1935年10月19日の条、1090頁、『馬相伯先生年譜』張若谷編著、長沙商務印書館、1939年、139頁）。

144) 馬建忠の帰国（前掲『馬相伯先生年譜』147～149頁）も、朝鮮の前途に絶望したと述懐する表向きの理由（前掲『一日一談』1935年10月19日の条、1090～1091頁）とは異なり、馬建忠と同様、朝鮮駐

留軍との間が円滑にはゆかなかったからではないか。かれ自身のちに、自分の帰国の原因ではないとはしているが、袁世凱が讒言し、呉長慶が猜疑した事実はあったからである（同上、1935年10月20日の条、1091頁、前掲『馬相伯先生年譜』142～143頁）。

145) 『清史稿』馬建忠傳，中華書局標点本，第41冊12483頁を参照。

146) 朝鮮海関の設立については、前註124) 142) 参照。またその推移は、別稿でとりあげる予定である。

147) 前掲拙稿，121～122頁。

148) 前註124) にふれた、鉦山開港を協議する金弘集との筆談で、この借款についてもつとに検討が始まっていた。したがって契約書の清朝側署名は唐廷樞ひとりだけだが、事前に馬建忠がかれと「密謀」しているのも当然である（『中日韓』第3巻、総理衙門あて李鴻章函，光緒8年8月初8日受理，総理衙門あて李鴻章咨文，光緒8年8月25日受理，910，967～970頁）。

この借款は企画当初から一貫して、日本への対抗をめざしたものである。それは馬建忠・金弘集の筆談をはじめ、関連する李鴻章のあらゆる文書をみれば、一目瞭然である。高橋前掲書，141頁註35に、「李は、朝鮮の求めに応じ関税や鉦山を抵当に招商局より五十万両の借款供与を行おうとしていた（壬午事変前より清は朝鮮の鉦山資源に関心を持っており、これが事変後の清の朝鮮鉦山調査につながった）。しかし奏摺の中で述べているように、李にとってこれは、政治的意味をもつものではなく、各国通例の経済投資にすぎなかった」というのは、誤解というほかない。

149) 前註136) にふれた、李鴻章の朝鮮政策を批判した張佩綸の対案の骨子は、「朝鮮通商大臣」を派遣駐在させるにあり、何如璋がかつて「主持朝鮮外交議」で提案したところと同じだった。李鴻章は前註137) の張佩綸に対する反駁のなかで、「主持朝鮮外交議」を却けた経緯をあらためて説明したうえで、次のように述べる。

張佩綸の提言に従って、高官を選抜派遣し、朝鮮通商大臣とすれば、朝鮮の外交を担当するのみならず、朝鮮の内政にも関与するから、それは監國にほほひとしい。これまで勅使には、一定の格式があつて、通商大臣は朝鮮国王と対等だから、どこまで大臣がやり国王がやるのか、対立するだろう。また以後、各国も朝鮮と交渉するには、必ず中国だけに責任を問うてこようから、恐らく朝廷と総理衙門は、その煩にたえまい。……いま日本と朝鮮は江華条約を結んで、すでに七年になる。あのとき条文で朝鮮を「自主之國」と認めた。朝鮮では万国公法にくらかったから、深く責めるわけにもいかないし、禮部に知らせてきたとき、こちらは何の反駁もしなかった。今年アメリカ・イギリス・ドイツと朝鮮が条約をむすび、はじめて「中國屬國」と表明すると、日本はようやく不満を言い立て、各国も疑義あるを免れず、来るべき批准交換のさい、おそらく何か言ってくるはずだ。もし大臣を欽派して朝鮮に駐在し、その外交を担当させれば、日本と英・米の条約を画一に処理せねばならないが、それはきわめてむずかしい。だからといつても画一にしなければ、それも原則から逸脱する。……朝鮮の国内政治は、中国はそれまで干渉したことがない。いったんひそかにその権力を制しながら、異なる風土で、適任の人材を得ないため、措置の緩急が必ずしもこちらの意のままにならず、もし朝鮮側が表面で従いながら裏面で背き、他人の教唆をうけて怨嗟を抱くようなことになったら、朝廷はいったいどう対処すればよいのだろう。

江華条約を奉ずる日本と、清朝に必ずしも従順ならざる朝鮮の動向、そして両者に対する清朝の位置と実力を考慮すれば、「自主」を否定し去り、「朝鮮通商大臣」を派遣するのは手に余る。「属国自主」とならざるをえなかったのである。

だからといって、それを従前とかわらぬ「属国自主」だとみては誤りである。それは前掲拙稿と本稿で明らかにしてきたとおりであり、この李鴻章の議論は、シューフェルト条約以来、「日本の敵視」から生まれてきた、自分＝馬建忠の「属国自主」（前掲拙稿，119～121頁）を、正式に政策として意義づけ、認めてもらおうとしたものなのである。したがってたとえば、

要するに、李の朝鮮政策は壬午事変以後においても「属邦」論の枠内のものであり、また日本との対抗もそれほど強く意識してはいなかったのである。こうした李の考えは具体的政策のなかにもつらぬかれている。壬午事変後の清の朝鮮支配政策と従来評価されてきた、清韓水陸貿易章程・清軍



駐留・メルレンドルフと馬建常の朝鮮政府顧問派遣は、朝鮮の「属国化」を意図したものではなかったのである。(高橋前掲書, 134頁)

という叙述には、断じて従うことはできない。また高橋氏のばあい、このようにみなす清朝＝李鴻章の朝鮮政策を、日本側の「対清協調」路線と対応せしめて立論しているので、当時の日本外交に対する氏の解釈にも、疑問を呈せざるをえない。

150) 田保橋潔『日清戦役外交史の研究』刀江書院, 1951年, 462, 466頁。

(2001年9月10日受理)

(おかもと たかし 文学部助教授)